別記様式第２号（その１の１）

基　本　計　画　書

基　本　計　画		
事　項	記　入　欄	備考
計画の区分	学部の設置	
フリガナ 設置者	ｶﾞｯｺｳﾎｳｼﾞﾝ　ｿｳｶﾀﾞｲｶﾞｸ 学校法人　創価大学	
フリガナ 大学の名称	ｿｳｶﾀﾞｲｶﾞｸ 創価大学　（　Soka University　）	
大学本部の位置	東京都八王子市丹木町一丁目236番地	
大学の目的	本学は、創立者池田大作先生の建学の精神に基づき、学校教育法により、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、全人的な人間形成をはかるとともに、文化の発展と人類の福祉に貢献することを目的とする。	
新設学部等の目的	本学は、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供しゆく「創造的人間」の育成を目指している。この創造的人間像を踏まえ、本学部においては「グローバル化時代の国際教養」を身につけた「地球市民」を育成する。 本学部で学ぶ学生には、①人文・社会科学にわたる学際的知識、②高度な英語運用・コミュニケーション能力、③異文化理解力、④グローバル・マインド、⑤創造的問題解決力、という５つの能力を身につけさせる。 本学部の卒業生は、グローバルに展開する企業（国内、海外）、公的・公共機関、NGO・NPO団体等への就職、さらに国内外の大学院進学を経て国際機関等への就職や研究者への道など、幅広い進路が期待できる。	

新設学部等の概要

新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	年	人	年次 人	人		年　月 第　年次	
国際教養学部 [Faculty of International Liberal Arts]							
国際教養学科 [Department of International Liberal Arts]	4	80	－	320	学士(国際教養学)	平成26年4月 第1年次	東京都八王子市丹木町一丁目236番地
計		80	－	320			

同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）	
	経済学部 　経済学科〔定員減〕　（△50） 経営学部 　経営学科〔定員減〕　（△50） ・工学部情報システム工学科（廃止）　（△70） 　※平成26年4月学生募集停止 ・工学部生命情報工学科（廃止）　（△50） 　※平成26年4月学生募集停止 ・工学部環境共生工学科（廃止）　（△60） 　※平成26年4月学生募集停止 ・理工学部理工学科　（180）　（平成25年6月届出予定）

教育課程

新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
	講義	演習	実験・実習	計	
国際教養学部国際教養学科	181科目	8科目	11科目	200科目	124　単位

教員組織の概要

学部等の名称			専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等	
新設分	国際教養学部　国際教養学科		8 (8)	6 (1)	3 (3)	0 (0)	17 (12)	0 (0)	0 (0)	
	計		8 (8)	6 (1)	3 (3)	0 (0)	17 (12)	0 (0)	0 (0)	
既設分	経済学部　経済学科		13 (15)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	18 (20)	0 (0)	10 (10)	
	法学部　法律学科		13 (15)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	19 (21)	0 (0)	12 (13)	
	文学部　人間学科		37 (44)	13 (13)	0 (0)	0 (0)	50 (57)	0 (0)	27 (29)	
	経営学部　経営学科		10 (12)	5 (5)	1 (1)	1 (1)	17 (19)	0 (0)	15 (15)	
	教育学部　教育学科		4 (7)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	7 (10)	0 (0)	26 (27)	
	児童教育学科		7 (8)	5 (5)	0 0	0 (0)	12 (13)	0 (0)	18 (20)	
	理工学部　理工学科		24 (26)	14 (14)	2 (2)	12 (12)	52 (54)	0 (0)	13 (10)	理工学部「平成25年6月届出予定」
	看護学部　看護学科		6 (4)	9 (7)	6 (5)	6 (2)	27 (18)	8 (4)	24 (9)	
	［通信教育部］									
	経済学部 経済学科		2 (2)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	
	法学部　法律学科		2 (2)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	
	教育学部 教育学科		1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	
	児童教育学科		0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	
	学士課程教育機構		5 (5)	5 (5)	17 (17)	12 (12)	39 (39)	0 0	68 (70)	
	日本語・日本文化教育センター		0 (0)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	4 (4)	0 (0)	6 (6)	
	研究所		3 (3)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	
	計		127 (144)	71 (69)	32 (31)	32 (28)	262 (272)	8 (4)	219 (209)	
合計			135 (152)	77 (70)	35 (34)	32 (28)	279 (284)	8 (4)	219 (209)	

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計
	事務職員	167 人 (167)	41 人 (41)	208 人 (208)
	技術職員	5 (5)	0 (0)	5 (5)
	図書館専門職員	6 (6)	4 (4)	10 (10)
	その他の職員	0 (0)	32 (32)	32 (32)
	計	178 (178)	77 (77)	255 (255)

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計
	校舎敷地	262997.08 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	262997.08 ㎡
	運動場用地	108423.08 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	108423.08 ㎡
	小計	371420.16 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	371420.16 ㎡
	その他	371779.61 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	371779.61 ㎡
	合計	743199.77 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	743199.77 ㎡

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計
	171688.64 ㎡ (170208.90 ㎡)	0 ㎡ 0 ㎡	0 ㎡ 0 ㎡	171688.64 ㎡ (170208.90 ㎡)

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	127 室	135 室	10 室	19 室 (補助職員 0人)	6 室 (補助職員 0人)	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
	国際教養学部国際教養学部	17 室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書：1,196,844冊（1,115,844冊） 雑誌：7,434種（7,434種）
	国際教養学部	94,307〔20,827〕 (87,507〔20,027〕)	75〔25〕 (75〔25〕)	920〔920〕 (900〔900〕)	280 (260)	13,167 (13,167)	98 (98)	
	計	94,307〔20,827〕 (87,507〔20,027〕)	75〔25〕 (75〔25〕)	920〔920〕 (900〔900〕)	280 (260)	13,167 (13,167)	98 (98)	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	8,763.80 ㎡	1,200 席	1,290,079 冊	大学全体

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要	
	13,585.06 ㎡	陸上競技場、野球場、ラグビー場、プール等	大学全体

経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
経費の見積り	教員１人当り研究費等		430千円	430千円	430千円	430千円	－	－
	共同研究費等		1,000千円	1,000千円	1,000千円	1,000千円	－	－
	図書購入費	3,600千円	3,600千円	3,600千円	3,600千円	3,600千円	－	－
	設備購入費	500千円	500千円	500千円	500千円	500千円	－	－

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
	1,367千円	1,121千円	1,121千円	1,121千円	－	－

学生納付金以外の維持方法の概要	私立大学等経常費補助金、資産運用収入、寄付金　等

既設大学等の状況

大学の名称	創価大学							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次人	人		倍		
経済学部　経済学科	4	250	－	1,000	学士（経済学）	1.10	昭和46年	東京都八王子市丹木町一丁目236番地
計	－	250	－	1,000	－	1.10	－	
法学部　法律学科	4	250	－	1,150	学士（法学）	1.10	昭和46年	
計	－	250	－	1,150	－	1.10	－	
文学部　人間学科	4	370	－	1,540	学士（文学）	1.10	平成19年	
計	－	370	－	1,540	－	1.10	－	
経営学部　経営学科	4	250	－	1,000	学士（経営学）	1.11	昭和51年	
計	－	250	－	1,000	－	1.11	－	
教育学部　教育学科	4	80	－	380	学士（教育学）	1.11	昭和51年	
児童教育学科	4	100	－	400	学士（教育学）	1.14	昭和51年	
計	－	180	－	720	－	1.12	－	
工学部　情報ｼｽﾃﾑ工学科	4	70	－	310	学士（工学）	1.14	平成３年	
生命情報工学科	4	50	－	260	学士（工学）	1.09	平成３年	
環境共生工学科	4	60	－	240	学士（工学）	1.10	平成15年	
計	－	180	－	720	－	1.11	－	
看護学部　看護学科	4	80	－	80	学士（看護学）	1.03	平成25年	
計	－	80	－	80	－	1.03	－	
［通信教育部］								
経済学部　経済学科	4	2,000	－	8,000	学士（経済学）	0.17	昭和51年	
計	－	2,000	－	8,000	－	0.17	－	
法学部　法律学科	4	2,000	－	8,000	学士（法学）	0.14	昭和51年	
計	－	2,000	－	8,000	－	0.14	－	
教育学部　教育学科	4	300	－	1,200	学士（教育学）	1.47	昭和57年	
児童教育学科		700	－	2,800	学士（教育学）	0.45	昭和57年	
計	4	1,000	－	4,000	－	0.80	－	
［大学院］〈修士課程〉								
文学研究科　国際言語教育専攻	2	15	－	30	修士（教育学）	0.70	平成21年	
計	－	15	－	30	－	0.70	－	

既設大学等の状況	［大学院］〈博士前期課程〉									
	経済学研究科 経済学専攻	2	15	―	30	修士（経済学）	0.36	昭和50年		
	計	－	15	―	30	－	0.36	－		
	法学研究科　法律学専攻	2	15	―	30	修士（法学）	0.70	昭和50年		
	計	－	15	―	30	－	0.70	－		
	文学研究科　英文学専攻	2	10	―	20	修士（英文学）	0.15	昭和50年		
	文学研究科　社会学専攻	2	10	―	20	修士（社会学）	0.55	昭和50年		
	文学研究科　教育学専攻	2	15	―	30	修士（教育学）	0.66	昭和61年		
	文学研究科　人文学専攻	2	8	―	16	修士（人文学）	0.37	平成４年		
	計	－	43	―	86	－	0.55	－		
	工学研究科　情報ｼｽﾃﾑ工学専攻	2	30	―	60	修士（工学）	0.92	平成７年		
	工学研究科　生命情報工学専攻	2	20	―	40	修士（工学）	1.05	平成７年		
	工学研究科　環境共生工学専攻	2	25	―	50	修士（工学）	0.84	平成19年		
	計	－	75	―	150	－	0.93	－		
	［大学院］〈博士後期課程〉									
	経済学研究科 経済学専攻	3	5	―	15	博士（経済学）	0.40	昭和52年		
	計	－	5	―	15	－	0.40	－		
	法学研究科　法律学専攻	3	3	―	9	博士（法学）	0.00	昭和52年		
	計	－	3	―	9	－	0.00	－		
	文学研究科　英文学専攻	3	5	―	15	博士（英文学）	0.33	昭和52年		
	文学研究科　社会学専攻	3	5	―	15	博士（社会学）	0.13	昭和52年		
	文学研究科　教育学専攻	3	2	―	6	博士（教育学）	0.66	平成元年		
	文学研究科　人文学専攻	3	4	―	12	博士（人文学）	0.08	平成６年		
	計	－	16	―	48	－	0.46	－		
	工学研究科　情報ｼｽﾃﾑ工学専攻	3	4	―	12	博士（工学）	0.33	平成９年		
	工学研究科　生命情報工学専攻	3	4	―	12	博士（工学）	1.66	平成９年		
	工学研究科　環境共生工学専攻	3	3	―	9	博士（工学）	1.22	平成19年		
	計	－	11	―	33	－	1.07	－		
	［大学院］〈専門職課程〉									
	法務研究科　法務専攻	3	35	―	105	法務博士（専門職）	0.81	平成16年		
	計	－	35	―	105	－	0.81	－		
	教職研究科　教職専攻	2	25	―	50	教職修士（専門職）	1.04	平成20年		
	計	－	25	―	50	－	1.04	－		
	［別科］									
	日本語研修課程	1	35	―	35	―	0.82	昭和51年		
	特別履修課程	1	40	―	40	―	0.27	平成16年		
	計	－	75	―	75	―	0.55	－		
	大　学　の　名　称	創価女子短期大学								
	学　部　等　の　名　称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	現代ビジネス学科	2	150	―	300	短期大学士（現代ビジネス）	1.15	昭和60年	東京都八王子市丹木町一丁目236番地	
	英語コミュニケーション学科	2	125	―	250	短期大学士（英語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ）	1.09	昭和60年		
	合計	－	275	―	550	－	1.12	－		

附属施設の概要	名　　称：平和問題研究所 目　　的：平和の達成に関する諸問題の調査・研究 設置年月：昭和51年4月 規 模 等：建物 32.86㎡（文系校舎内の7階） 設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地 名　　称：比較文化研究所 目　　的：日本及び世界の文化に関する諸問題の比較研究 設置年月：昭和56年11月 規 模 等：建物 32.86㎡（文系校舎内の8階） 設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地 名　　称：生命科学研究所 目　　的：生命並びにそれに関連する諸問題についての科学的な研究 設置年月：昭和63年12月 規 模 等：建物 1,783.00㎡　実験室18室、研究室6室、教室1室、自習室2室、暗室2室、測定室2室、洗浄室1室、 遠心機室1室、培養室1室、分配調合室1室、貯蔵室1室、廃棄物保管室1室、汚染検査室1室 設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地	

附属施設の概要	名　　称：国際仏教学高等研究所 目　　的：仏教の思想・哲学の特徴と現代的意義に関する研究 設置年月：平成9年4月 規 模 等：建物 811.90㎡（文系校舎別館の2階）研究室5室、リファレンス室1室、書庫2室 設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地 名　　称：法科大学院要件事実教育研究所 目　　的：法科大学院における要件事実教育の充実と発展を図るための調査研究 設置年月：平成16年10月 規 模 等：建物 24.00㎡（本部棟校舎内の12階） 設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地 名　　称：創価教育研究所 目　　的：創価教育の思想と実践の研究 設置年月：平成18年4月 規 模 等：建物 1,218.00㎡（文系校舎内の8階） 設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地	

別記様式第２号（その２の１）

教　育　課　程　等　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
共通科目	大学科目	人間教育論Ⅰ	1･2･3･4前後		2		○								兼9	オムニバス
		人間教育論Ⅱ	1･2･3･4前後		2		○								兼7	オムニバス
		Soka Education	1･2･3･4前後		2		○								兼2	オムニバス
		創価教育論	1･2･3･4前後		2		○								兼6	オムニバス
		小計（4科目）	－	0	8	0	－			0	0	0	0	0	兼20	
	キャリア教育科目	キャリア開発フォーラム	1･2･3･4前後		2		○								兼1	
		ワールドビジネスフォーラム	1･2･3･4前後		2		○								兼1	
		トップが語る現代経営	1･2･3･4前後		2		○								兼2	
		インターンシップⅠ	1･2･3･4前後		1				○						兼1	
		インターンシップⅡ	1･2･3･4前後		1				○						兼1	
		インターンシップⅢ	1･2･3･4前後		2				○						兼1	
		インターンシップⅣ	1･2･3･4前後		2				○						兼1	
		小計（7科目）	－	0	12	0	－			0	0	0	0	0	兼5	
	言語科目（英語）	English for Academic Purposes	1前	2			○				1	2			兼1	
		English for Academic Purposes: Study Abroad Ⅰ	1後	8			○			3						留学科目
		English for Academic Purposes: Study Abroad Ⅱ	2前	8			○			3						留学科目
		小計（3科目）	－	18	0	0	－			3	1	2	0	0	兼1	
	言語科目（第２外国語）	ドイツ語Ⅰ	3前		2		○								兼3	週2回
		ドイツ語Ⅱ	3後		2		○								兼3	週2回
		ドイツ語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		ドイツ語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		ドイツ語Ⅴ	4前		1		○								兼1	
		ドイツ語Ⅵ	4後		1		○								兼1	
		フランス語Ⅰ	3前		2		○								兼3	週2回
		フランス語Ⅱ	3後		2		○								兼3	週2回
		フランス語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		フランス語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		フランス語Ⅴ	4前		1		○								兼1	
		フランス語Ⅵ	4後		1		○								兼1	
		中国語Ⅰ	3前		2		○								兼9	週2回
		中国語Ⅱ	3後		2		○								兼9	週2回
		中国語Ⅲ	4前		1		○								兼3	
		中国語Ⅳ	4後		1		○								兼3	
		中国語Ⅴ	4前		1		○								兼1	
		中国語Ⅵ	4後		1		○								兼1	
		スペイン語Ⅰ	3前		2		○								兼4	週2回
		スペイン語Ⅱ	3後		2		○								兼4	週2回
		スペイン語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		スペイン語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		スペイン語Ⅴ	4前		1		○								兼1	
		スペイン語Ⅵ	4後		1		○								兼1	
		イタリア語Ⅰ	3前		2		○								兼2	週2回
		イタリア語Ⅱ	3後		2		○								兼2	週2回
		イタリア語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		イタリア語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		イタリア語Ⅴ	4前		1		○								兼1	
		イタリア語Ⅵ	4後		1		○								兼1	
		ハングルⅠ	3前		2		○								兼4	週2回
		ハングルⅡ	3後		2		○								兼4	週2回
		ハングルⅢ	4前		1		○								兼1	
		ハングルⅣ	4後		1		○								兼1	
		ハングルⅤ	4前		1		○								兼1	

授業科目の名称			配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
共通科目	言語科目（第2外国語）	ハングルⅥ	4後		1		○								兼1	
		ロシア語Ⅰ	3前		2		○								兼2	週2回
		ロシア語Ⅱ	3後		2		○								兼2	週2回
		ロシア語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		ロシア語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		ロシア語Ⅴ	4前		1		○								兼1	
		ロシア語Ⅵ	4後		1		○								兼1	
		小計（42科目）	－	0	60	0	－			0	0	0	0	0	兼30	
	言語科目（日本語）	日本語ＡⅠ	3前		2		○								兼1	週2回
		日本語ＡⅡ	3後		2		○								兼1	週2回
		日本語ＢⅠ	3前		1		○								兼1	
		日本語ＢⅡ	3後		1		○								兼1	
		日本語ＣⅠ	3前		1		○								兼1	
		日本語ＣⅡ	3後		1		○								兼1	
		日本語ＤⅠ	3前		1		○								兼1	
		日本語ＤⅡ	3後		1		○								兼1	
		日本語ＥⅠ	3前		1		○								兼1	
		日本語ＥⅡ	3後		1		○								兼1	
		日本語ＦⅠ	3前		1		○								兼1	
		日本語ＦⅡ	3後		1		○								兼1	
		小計（12科目）	－	0	14	0	－			0	0	0	0	0	兼6	
	言語科目（第3外国語）	ポルトガル語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		ポルトガル語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		ポルトガル語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		ポルトガル語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		アラビア語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		アラビア語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		アラビア語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		アラビア語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		スワヒリ語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		スワヒリ語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		スワヒリ語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		スワヒリ語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		タイ語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		タイ語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		タイ語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		タイ語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		トルコ語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		トルコ語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		トルコ語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		トルコ語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		ブルガリア語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		ブルガリア語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		ブルガリア語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		ブルガリア語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		モンゴル語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		モンゴル語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		モンゴル語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		モンゴル語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		インドネシア・マレー語Ⅰ	3前		1		○								兼1	
		インドネシア・マレー語Ⅱ	3後		1		○								兼1	
		インドネシア・マレー語Ⅲ	4前		1		○								兼1	
		インドネシア・マレー語Ⅳ	4後		1		○								兼1	
		言語演習Ⅰ	3前		1		○								兼3	
		言語演習Ⅱ	3後		1		○								兼3	
		言語演習Ⅲ	4前		1		○								兼3	
		言語演習Ⅳ	4後		1		○								兼3	
		小計（36科目）	－	0	36	0	－			0	0	0	0	0	兼11	

授業科目の名称			配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通科目	健康・体育科目	体育実技Ⅰ	1･2･3･4前後		1				○						兼3
		体育実技Ⅱ	1･2･3･4前後		1				○						兼2
		体育実技Ⅲ	1･2･3･4前後		1				○						兼3
		体育実技Ⅳ	1･2･3･4前後		1				○						兼3
		体育講義Ⅰ	1･2･3･4前後		2		○								兼3
		体育講義Ⅱ	1･2･3･4前後		2		○								兼2
		小計(6科目)	―	0	8	0	―			0	0	0	0	0	兼4
	人文・芸術・思想科目	音楽Ⅰ	3・4前		2		○								兼1
		音楽Ⅱ	3・4後		2		○								兼1
		美術Ⅰ	3・4前		2		○								兼1
		美術Ⅱ	3・4後		2		○								兼1
		文学Ⅰ	3・4前		2		○								兼2
		文学Ⅱ	3・4後		2		○								兼3
		哲学	3・4前後		2		○								兼1
		倫理学	3・4前後		2		○								兼1
		歴史Ⅰ	3・4前後		2		○								兼5
		歴史Ⅱ	3・4前後		2		○								兼3
		言語学	3・4前後		2		○								兼1
		学術文章作法Ⅰ	3・4前後		2		○								兼1
		学術文章作法Ⅱ	3・4前後		2		○								兼2
		学術文章作法Ⅲ	3・4前後		2		○								兼4
		小計（14科目）	―	0	28	0	―			0	0	0	0	0	兼23
	社会・文化・生活科目	法学概説	3・4前後		2		○								兼1
		日本国憲法	3・4前後		2		○								兼2
		心理学概論	3・4前後		2		○								兼2
		小計（3科目）	―	0	6	0	―			0	0	0	0	0	兼5
	自然・数理・情報科目	数学基礎Ⅰ	2後･3前後		2		○								兼1
		数学基礎Ⅱ	2後･3前後		2		○								兼2
		物理科学Ⅰ	2後･3前後		2		○								兼1
		物理科学Ⅱ	2後･3前後		2		○								兼1
		コンピュータ・リテラシーⅠ	2後･3前後		2		○								兼1
		コンピュータ・リテラシーⅡ	2後･3前後		2		○								兼1
		プログラミング	2後･3前後		2		○								兼1
		情報科学Ⅰ	2後･3前後		2		○								兼2
		情報科学Ⅱ	2後･3前後		2		○								兼2
		生命科学Ⅰ	2後･3前後		2		○								兼3 オムニバス
		生命科学Ⅱ	2後･3前後		2		○								兼2 オムニバス
		環境科学Ⅰ	2後･3前後		2		○								兼2
		環境科学Ⅱ	2後･3前後		2		○								兼4
		小計（13科目）	―	0	26	0	―			0	0	0	0	0	兼22
	学際系科目（平和・人権・世界）	２１世紀文明論	3・4前後		2		○								兼1 オムニバス
		総合科目特講	3・4前後		2		○								兼1 オムニバス
		現代マスコミ論	3・4前後		2		○								兼2 オムニバス
		国際ボランティア実習	3・4前後		2				○	1					
		八王子学	3・4前後		2		○								兼1 オムニバス
		サービスラーニング（社会貢献と学び）	3・4前後		2				○						兼3
		平和学Ⅰ	3・4前後		2		○								兼1
		平和学Ⅱ	3・4前後		2		○								兼1 オムニバス
		地域研究Ⅰ	3・4前後		2		○								兼5 オムニバス
		地域研究Ⅱ	3・4前後		2		○								兼6 オムニバス
		日本研究Ⅰ	3・4前後		2		○								兼1
		日本研究Ⅱ	3・4前後		2		○								兼1
		共通総合演習Ⅰ	3・4前後		2			○							兼10
		共通総合演習Ⅱ	3・4前後		2			○							兼9
		小計（14科目）	―	0	28	0	―			1	0	0	0	0	兼24
共通科目小計（154科目）			―	18	226	0	―			3	1	2	0	0	

授業科目の名称			配当年次	単位数 必修	選択	自由	授業形態 講義	演習	実験・実習	専任教員等の配置 教授	准教授	講師	助教	助手	備考	
専門科目	学部共通科目群	Academic Foundations	1前	2			○				1	2			兼1	
		Academic Foundations: Study Abroad I	1後	6			○			3						留学科目
		Academic Foundations: Study Abroad II	2前	6			○			3						留学科目
		Cross-cultural Understanding	1前	4			○			1	1	2				
		Introductory Statistics	1前	4			○			2						
		Introduction to Global Culture and Society	2後	4			○				1	1				
		Introduction to International Relations and Politics	2後	4			○				2					
		Introduction to Global Economy and Business	2後	4			○				2					
		Academic Writing Ⅰ	2後	2			○				1	2			兼1	
		Academic Writing Ⅱ	3後		2		○				1	2				
		Academic Writing Ⅲ	4後		2		○				1	2				
		Basic Seminar Ⅰ	1前	2				○		6						
		Basic Seminar Ⅱ	2後	2				○		6						
		Seminar Ⅰ	3前	2				○		8	5	1				TT
		Seminar Ⅱ	3後	2				○		8	5	1				
		Seminar Ⅲ	4前	2				○		8	5	1				
		Capstone	4後	4				○		8	5	1				
		International Fieldwork	2休(春)・3休(春)		2				○	1						集中
		Global Workshop I	2休(春)		1		○			1						集中
		Global Workshop II	3休(春)		1		○			1						集中
		小計（20科目）	－	50	8	0	－			8	6	3	0	0	兼1	
	歴史・文化科目群	Modern World History	3･4前		4		○			1						
		International History in the 20th century	3･4後		4		○			1						
		Global Issues in Social Policy	3･4前		4		○			1						
		Education for Sustainable Development	3･4後		4		○			1						
		Modern Social Thought	3･4前		4		○				1					
		Global Justice and Intercultural Ethics	3･4後		4		○				1					
		Global Sociology and Anthropology	3･4前		4		○					1				
		Transnational Migration	3･4後		4		○					1				
		小計（8科目）	－	0	32	0	－			2	1	1	0	0		
	政治・国際関係科目群	Contemporary Political Theory	3･4前		4		○			1						
		Citizenship and Democracy in a Global Age	3･4後		4		○			1						
		Great Power Politics in the World	3･4前		4		○				1					
		International Political Economy	3･4前		4		○				1					
		International Institutions and Global Governance	3･4前		4		○			1						
		International Relations in Asia	3･4後		4		○			1						
		International Bargaining	3･4後		4		○				1					
		Comparative Politics	3･4後		4		○				1					
		Management of Non-Profit Organizations	3･4後		4		○			1						
		小計（9科目）	－	0	36	0	－			3	2	0	0	0		
	経済・経営科目群	Microeconomics	3･4前		4		○			1						
		Macroeconomics	3･4後		4		○			1						
		Poverty and Development	3･4前		4		○			1						
		History and Theory of World Economy	3･4後		4		○			1						
		Management Science	3･4前		4		○				1					
		International Business	3･4後		4		○				1					
		Marketing	3･4前		4		○				1					
		Operations Management	3･4後		4		○				1					
		International Human Resource Management	3･4前		2		○								兼1	
		小計（9科目）	－	0	34	0	－			2	2	0	0	0	兼1	
専門科目小計（46科目）				50	110	0	－			8	6	3	0	0	兼2	
合計（200科目）			－	68	336	0	－			8	6	3	0	0		
学位又は称号		学士（国際教養学）		学位又は学科の分野			文学関係、法学関係、経済学関係									

※「TT」はチーム・ティーチング

<table>
<tr><th>卒　業　要　件　及　び　履　修　方　法</th><th colspan="2">授業期間等</th></tr>
<tr><td rowspan="3">○卒業要件
本学に４年以上在学し、以下の履修方法に沿って１２４単位以上を修得し、
かつ在学期間における通算ＧＰＡが２以上であること。

○履修方法
国際教養学部では、１～４の項目に沿って４年間にわたり学習を行う。
１．<u>共通科目　　２６単位</u>（ただし、以下の①から③を満たすこと）
①大学科目から４単位
②言語科目（英語）１８単位
③言語科目（第２外国語）または言語科目（日本語）から４単位

２．<u>専門科目　　７８単位</u>（ただし、以下の①、②を満たすこと）
①学部共通科目群のうち、必修としている科目５０単位
②歴史・文化科目群、政治・国際関係科目群、経済・経営科目群の
３つの科目群から１つの科目群を選択し、選択した科目群から１２単位、
及びそれ以外の２つの科目群からそれぞれ８単位ずつ

３．<u>自由選択科目　　２０単位以上</u>
（上記１または２の基準を超えて修得した科目、及び他学部専門科目）

４．上記１～３で修得する単位のうち、本学が「自然科学系科目」として指定する
科目を８単位以上含むこと

なお、履修科目の登録の上限を２０単位（１セメスター）とする。</td><td>１学年の学期区分</td><td>２期</td></tr>
<tr><td>１学期の授業期間</td><td>１５週</td></tr>
<tr><td>１時限の授業時間</td><td>９０分</td></tr>
</table>

別記様式第２号（その３の１）

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	大学科目	人間教育論Ⅰ	「英知を磨くは何のため　君よそれを忘るるな」「労苦と使命の中にのみ　人生の価値は生まれる」――これは創立者が本学創立に当たり寄贈されたブロンズ像の台座に刻まれた言葉である。また、創立者は本学の基本理念として、「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレスたれ」との三つのモットーを掲げられている。これらの指針に象徴される本学の歴史と理念を知ることは、４年間の学生生活をいっそう実りあるものとする上で、一つの大きな契機となるであろう。本授業では、創立者の御著作・講演を通して、創価大学とはどういう大学であり、何を目指しているのかを考えるとともに、受講者との議論も交えつつ大学建設の未来を展望したい。	オムニバス
		人間教育論Ⅱ	人間教育の目的のひとつは、人間についての深い理解、洞察力を養うことである。「何百年という時間の淘汰作用を経て生き延びてきた古典や名作には読者の内発的精神性を刺激してやまない語り掛けが満ちている」（池田大作著『教育提言』趣意。）学生時代に人類の遺産ともいうべき古典・名著に触れることは、精神性、創造性に満ちた人間理解の地平を獲得する貴重な機会となる。本講義は学生諸君に古典、名著の読了と人間理解を促す。本講義は、古典・名著の背景、内容、現代的意義を講じることで、学生に幅広く深い人間理解を獲得する機会を提供し、本学教育の目標である人間教育に貢献することを目的とする。なお、各講義には15分の質問の時間を設ける。また、本講義は複数教員によるリレー式講義であり、最後に８人の担当者によるシンポジウムを行う予定。	オムニバス
		Soka Education	本授業は、創価教育学体系の理念と、そのはじまりから今日までの歩みを考察する。はじめに、創価教育学の創設者である牧口常三郎の生涯を振り返る。その牧口の教えが弟子である戸田城聖に引き継がれ、彼の指導のもとで民衆運動として発展した創価学会の歴史を見る。その後、創価教育学を今日のグローバル社会に適応させた池田大作の業績を学ぶ。とくに、牧口と戸田の教育理論と実践の基礎を置く創価教育学の理念を池田が革新的に発展させたことに着目する。	オムニバス
		創価教育論	「創価教育」とは何か、ということをみんなで考えてみよう。これがこの授業の最大のテーマです。担当者も一人ではなく、「創価教育研究所」の教職員が交代で講義をいたします。考える材料は、「創価教育学」の提唱者であり「創価教育学の父」といわれる牧口常三郎先生の御生涯から始まり、それを受け継いだ戸田城聖先生、そして創立者池田大作先生の思想と実践です。さらに、現在「創価教育の現場」である創価大学の歴史については、一つひとつ丁寧に見ていきたいと思っています。そして、創立者池田先生の示された教育論を通じて「創価教育」について考えていきたいと思っています。	オムニバス
	キャリア教育科目	キャリア開発フォーラム	本授業は、様々な業界・職種の第一線で活躍する本学ＯＢ・ＯＧを講師として迎え、学生時代の過ごし方は勿論、働くことやキャリアについて率直に語っていただきます。また、キャリアデザインに関する専門家による、ワークスタイル（＝働き方）についての理解を深める講義も行います。 本授業をキッカケに、「仕事」や「働くこと」について考えを深め、急速な変化を遂げる現代社会において、何を学び、どのような学生生活を送るのかを考えていきましょう。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	キャリア教育科目	ワールドビジネスフォーラム	本講義では毎回、グローバルに展開する企業での海外勤務体験を有する本学卒業生を講師として招き、講師と学生による双方向的な授業を行います。前半は海外での勤務体験の話を中心に、後半はキャリアパスを中心に授業を行い、世界を舞台に活躍するための「知識」や「スキル」を理解します。また講師の方には「印象に残った仕事」や「自分の仕事が世界とどうつながっているか」、さらには今日のグローバル企業で「どんな人材が求められているか」などを率直に語っていただきます。	
		トップが語る現代経営	企業や様々な組織の経営トップの方々を毎回ゲストとしてお招きし、その「生きた経営」を語っていただく授業です。テーマはそれぞれのゲストの方々に毎回設定していただくことになっていますが、基本的には、関係する業界・企業のお話や組織経営の体験に基づいたリーダーとしての生き様などが講演内容となります。本講は、日本のビジネス世界を動かしているトップの方々の視点から見た現実の社会を開示する講義であり、単に企業経営にとどまらず社会で活躍する人間としての考え方や行動を学んでもらう絶好の講義です。	
		インターンシップⅠ	本学のインターンシップでは、企業や官公庁等、職場での就業体験を通して、働くことへの理解（就業観・勤労観の育成）を深めること、そして、実社会で求められている就業力を肌で感じ、自らの課題を見つけ、今後の学生生活で伸ばすべき能力を明確にすることを目指しています。到達目標：１．学問と社会の繋がりを意識し、今後の学習目標を立てること、２．社会で求められる就業力を知り、今後、自らが伸ばすべき就業力を理解すること、３．社会や企業活動の実態に触れ、自己の卒業後の進路選択に際し参考にすること。なお、就業体験は、原則、５日間40時間以上であること。	
		インターンシップⅡ	インターシップⅠの経験と学修に基づいて、さらに多くのインターシップを体験したい方のための科目です。インターシップⅠと同様に、企業や官公庁等、職場での就業体験を通して、自らの課題を発見し、働くことへの理解（就業観・勤労観の育成）を深めること、そして、実社会で求められている就業力を肌で感じ、自らの課題を見つけ、今後の学生生活で伸ばすべき能力を明確にすることを目指しています。インターンシップIと同じく、５日間４０時間以上の就業体験を求めます。	
		インターンシップⅢ	インターシップⅠ及びⅡの経験と学修に基づいて、さらに多くのインターシップを体験し、自身のキャリア形成への考えを深めたい方のための科目です。インターシップⅠ及びIIと同様に、企業や官公庁等、職場での就業体験を通して、働くことへの理解（就業観・勤労観の育成）を深めること、そして、実社会で求められている就業力を肌で感じ、自らの課題を見つけ、今後の学生生活で伸ばすべき能力を明確にすることを目指しています。インターンシップⅠ・IIと同じく、５日間40時間以上の就業体験を求めます。	
		インターンシップⅣ	インターシップⅠ、Ⅱ及びⅢよりもさらに多くのインターシップを体験し、自身のキャリア形成への学びを深めたい方のための科目です。インターシップⅠ、II、IIIと同様に、企業や官公庁等、職場での就業体験を通して、働くことへの理解（就業観・勤労観の育成）を深めること、そして、実社会で求められている就業力を肌で感じ、自らの課題を見つけ、学生生活でさらに伸ばすべき能力を明確にすることを目指しています。他のインターンシップ科目と同じく、５日間40時間以上の就業体験を求めます。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（英語）	English for Academic Purposes	本科目では、１年間の海外留学を前提に、英語で行われる大学レベルの授業に積極的に参加するために必要な知識、スキル、ストラテジーを学ぶ。また、自立的学習者としての一般的なスキルとストラテジーも学ぶ。TOEFLを中心に、海外大学で行われるプレイスメントテストの準備も行う。それらのテストのスコアを上げるために、語彙、文法、リーディング、リスニング、TOEFL-iBTタイプのスピーキングやリーディングなどの訓練を行う。加えて、クラスでのコミュニケーションスキルや基本的なアカデミックスキルの向上も目指す。	
		English for Academic Purposes: Study Abroad Ⅰ	本科目は、１年次後期に海外の協定校で提供される英語学習のための授業に参加して、文法、語彙、リスニング、リーディングにわたる基礎的知識の確立を目指す。海外留学先で、学生は各自のレベルに応じてクラス分けされ、それぞれの英語のレベルに応じて、TOEFLなどのテストのスコアを向上させるために必要なスキルを伸ばす。英語能力の基礎を向上させることを通して、学生は、英語による授業のスタイルに慣れると共に、自発的な学びに重きを置いた学修のスタイルを身につける。	留学科目
		English for Academic Purposes: Study Abroad Ⅱ	２年次前期に海外協定校における英語学習の授業に参加する本科目は、学生自身の学修ストラテジーを発展させるために、より正確な文法、語彙力の強化、リーディング、ライティングといった英語運用能力のさらなる向上を目指す。それぞれの海外留学先で、学生が帰国までにTOEFL iBT 80相当のレベルを達成することを目標とする。本科目の主たる目的は、学生が、英語を用いた自立的学習者としての能力を養成することである。この能力は、学生が帰国後、本学部において英語で行われる専門的な講義科目や演習科目を受講する際に必須であり、留学先での学修を終える時点で十分な訓練を受けていることが期待される。	留学科目
	言語科目（第２外国語）	ドイツ語Ⅰ	入門レベルのドイツ語を学びます。簡単な挨拶からはじめて、家族や友人のこと、買い物や食事の表現、住居、余暇などのテーマを通して、入門的な事柄を学んでいきます。まずドイツ語のアルファベットからはじめ、人称格、基本的な動詞、文型の基本などを中心に、反復練習をしていきます。テキストは、ドイツ本国で開発されたものを使用します。基本的な発音や語彙についても学びますが、授業外課題を通して、授業内に小テストを行います。	週2回
		ドイツ語Ⅱ	ドイツ語の初級編です。簡単な挨拶、家族や友人のこと、買い物や食事の表現、住居、余暇など、日常生活で慣れ親しんだテーマを事例として、入門レベルより高度かつ多くの事項を学んでいきます。とくに、ここでは文法事項の基礎を仕上げることを目標とします。動詞や名詞の基本的な使用法かはじめて、現在完了形と助動詞の使い方を中心に学びます。ドイツ本国で開発されたテキストを使用し、毎回の授業で課題を出し、翌週に小テストを行い、反復練習を行います。	週2回
		ドイツ語Ⅲ	ドイツ語Ⅲでは、中級レベルのリーディングを中心に、反復練習を重視して行います。取り上げるテーマは、基本的な日常生活の様々な場面を描いた一般的なテーマです。たとえば、職業、旅行、健康、道案内、ファッション、お祭りなどのテーマなどがあります。テキストは、ドイツ本国で開発されたテキストを用います。毎回の授業のはじめに復習の時間を設けます。授業の後半では、次週までの課題についての解説を行います。課題については、次週のはじめに確認テストを行います。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	ドイツ語Ⅳ	ドイツ語Ⅳでは、中級レベルのライティングを中心に行います。職業、旅行、健康、道案内、ファッション、お祭りなどの日常生活のテーマを取り上げ、基本的なドイツ語作文の練習を行います。ライティングの基本は、あくまでも文法の基礎的知識を前提としているので、過去形や助動詞、さまざまな前置詞、目的語、基礎的な接続法、形容詞など、幅広い文法的知識の定着も同時に行っていきます。テキストは、ドイツ本国で開発されたテキストを用います。	
		ドイツ語Ⅴ	ドイツ語Ⅴでは、中級レベルのリスニングを中心に行います。基本的な文法的基礎はすでに学習したとはいえ、耳で聞くドイツ語を意味のある文節で理解するためには、相当の反復練習を必要とします。授業では、ドイツ本国で開発されたリスニング教材を用います。とにかく語学は反復しながら継続していくことが大切です。取り上げるテーマは、道案内やテレビ番組など、日常生活で遭遇する場面が中心です。何度も繰り返して聞く練習を行うことで、文法的知識が生きたドイツ語として感じられるようになることが目標です。	
		ドイツ語Ⅵ	ドイツ語Ⅵでは、中級レベルのスピーキングを中心に行います。スピーキングの学習は、リスニングをはじめとするそのほかの語学学習の成果の一つとして、成果が実感できる学習です。コミュニケーションの基本は、相手に伝えることでもあります。もちろん、いきなり難しい議論はできません。ドイツの日常生活で頻繁に使用される実用的な表現を多くの例を通して学んでいきます。ドイツで開発されたテキストを用いて、ロールプレイングなどを通して、反復練習を行います。	
		フランス語Ⅰ	フランス語の入門レベルの科目。初歩的なフランス語を理解し、読み、聞き、書くことができる能力を養う。初歩的な短文の構成と文章を理解し、短い対話を理解する。初歩的な文を聞き分け、挨拶等日常的な応答表現を理解し、数を聞きとる。日常的な短文を構成するのに必要な文法知識を学び、動詞としては直接法現在、近接未来、近接過去、命令法までを学ぶ。修了時にフランス語検定５級レベルへの到達を目指す。毎時間、予習と復習を兼ねた小テストを実施する。	週2回
		フランス語Ⅱ	フランス語の初級レベルの科目。基礎的な日常的フランス語を理解し、読み、聞き、書くことができる能力を養う。基礎的な短文の構成と文章を理解し、基礎的な対話を理解する。基礎的な文を聞き分け、日常使われる基礎的応答表現を理解し、数を使った表現を聞きとる。基礎的な日常表現の単文を構成するのに必要な文法的知識を学ぶ。動詞としては、直説法（現在、近接未来、近接過去、複合過去、半過去、単純未来、代名動詞）と命令法を学ぶ。毎時間、予習と復習を兼ねた小テストを実施する。	週2回
		フランス語Ⅲ	フランス語の初級レベルの修得を前提として、中級前半レベルの読解と書く能力を養う科目。フランス語で日常的に使われる表現を理解し、簡単な表現による長文の内容を理解できるようになる。また、日常生活で使われる簡単な文章表現や、基本的語句を正しく書くことができるようになる。文章表現の学習と並行して、基本的文法知識全般の知識の定着を図る。動詞については、直説法、命令法、定形的な条件法現在と接続法現在を特に修得する。毎時間、予習と復習を兼ねた小テストを実施する。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	フランス語Ⅳ	フランス語IIIの履修を前提として、中級後半レベルの読解と書く能力を養う科目。フランス語で日常的に使われる表現を理解し、簡単な文による長文の内容を理解できるようになる。また、日常生活で使われる簡単な文章表現や、基本的語句を正しく書くことができるようになる。文章表現の学習と並行して、基本的文法知識全般の知識の定着を図る。動詞については、直説法、命令法、定形的な条件法現在と接続法現在を特に修得する。毎時間、予習と復習を兼ねた小テストを実施する。修了時にフランス語検定３級の読み書きのレベルに到達する。	
		フランス語Ⅴ	フランス語の初級レベルの修得を前提として、中級前半レベルの聞き、話す能力を主に養う科目。フランス語の簡単な日常表現を聞き、話す能力を養うことを目的とする。フランス語の発音の習得は日本語母語者には特に困難な部分なので、発音の学習には、授業外での練習を求める。聞き取りでは、簡単な会話を聞いて、内容を理解できるようになる。特に聞き取りの練習と並行して、基本的文法知識全般の知識の定着を図る。動詞については、直説法、命令法、定形的な条件法現在と接続法現在を特に修得する。	
		フランス語Ⅵ	フランス語Vの履修を前提として、中級後半レベルの聞き取りと話す能力を養う科目。日常生活や旅行で遭遇する大体の状況に対応することができるフランス語を話し、理解できるようになる。身近な話題や興味を持っている分野に関しても、会話できるようになる。基地の話題を扱った会話であれば、ある程度抽象的な話題でも理解することができるようになる。口語表現の学習と並行して、基本的文法知識全般の知識の定着を図る。修了時にフランス語検定３級レベルの聞き取りと、話す能力のレベルに到達する。	
		中国語Ⅰ	本科目は、中国語の入門科目である。授業では、中国語の非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができるレベルを目指す。発音に関しては、声調、母音、子音など中国語ピンインの正しい発音をしっかり身につけることを目指す。１５０語程度の基礎常用中国語を学び、ごく基礎的な文法事項を学ぶ。定形的な挨拶や表現を覚えて、適切な場面で使えるようにする。発音については、授業外での練習を求める。授業内小テストを通じて学習の定着を図る。	週2回
		中国語Ⅱ	本科目は、中国語の初級レベルの科目である。中国語を用いた簡単な日常会話を理解することができ、簡単な定型的表現を、様々な場面で使う練習を行う。３００語程度の基礎的常用中国語を理解し、それに相応する文法事項を学ぶ。単純で短い文章を理解し、書くことができるようになる。発音の練習については、授業外での練習を求める。授業内小テストで学習の定着を図る。修了時に、HSK２級または中国語検定準４級レベルに到達することを目標にする。	週2回
		中国語Ⅲ	本科目は、中国語IとIIの履修を終えた者を対象として、中級前半レベルの基礎的文法を理解し、特に「読む」、「書く」の基本技能を身につけることを目標とする。６００語程度の基礎的常用中国語を文章の中で理解できるようになる。文章理解の必要に応じて、総合的に文法を学ぶ。生活、学習、仕事などの場面で話題になる具体的な事柄の説明を理解し、簡単な文章で自身の意見を伝えることができるようになる。授業内で実施する小テストで、新出単語と文法に関する知識の定着を図る。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	中国語Ⅳ	本科目は、中国語IIIの履修を終えた者を対象として、文法の理解と、「読む」「書く」能力において、中級後半レベルへの到達を目標とする。１０００語程度の基礎的常用中国語を文章表現の中で理解できるようになる。文章理解の必要に応じて、総合的に文法を学ぶ。生活、学習、仕事などの場面で話題になる具体的な事柄だけでなく、ある程度抽象的な話題についても、その説明を理解し、少し長い文章で自身の意見を伝えることができるようになる。授業内で実施する小テストで、新出単語と文法に関する知識の定着を図る。修了時にHSK３級の「読み」「書く」能力に到達することを目指す。	
		中国語Ⅴ	本科目は、中国語IとIIの履修を終えた者を対象として、中級前半レベルの基礎的文法を理解し、特に「聞く」、「話す」の基本技能を身につけることを目標とする。６００語程度の基礎的常用中国語を使用した表現を聞き取り、理解できるようになる。必要に応じて、総合的に文法を学ぶ。生活、学習、仕事などの場面で話題になる具体的な事柄の説明を理解し、簡単な文型を使った表現で、自身の意見を伝えることができるようになる。中国北京大学のテキストを参照しながら授業を行い、中国関連の最新話題を取り入れ、会話を重点的に行い、授業を進める。随時、授業内試験を実施する。	
		中国語Ⅵ	本科目は、中国語Vを履修した者を対象として、中級後半レベルの基礎的文法を理解し、特に「聞く」、「話す」の基本技能を高めることを目標とする。１０００語程度の基礎的常用中国語を使用した表現を聞き取り、理解できるようになる。必要に応じて、総合的に文法を学ぶ。生活、学習、仕事、旅行などの場面で、話題を限定せずに、相手の話を理解し、基本的なコミュニケーションをとれるようになる。中国北京大学のテキストを参照しながら授業を行い、中国関連の最新話題を取り入れ、会話を重点的に行い、授業を進める。随時、授業内試験を実施する。	
		スペイン語Ⅰ	スペイン語の入門レベルの科目である。大学でスペイン語を学ぶ場合、週 2 回という限られた時間的制約が大きな障害となる。しかしそのような制約の中でも、学習法によって、ある程度のレベルまで達することができる。従来の講読中心の方法では、あっという間に１セメスターが過ぎてしまう。日本人にとって比較的発音の容易なスペイン語の会話力は、基本的単語をくり返し学習することでかなり上達するようである。授業では毎回宿題が課され、これらを用意するには、１～２時間の予習時間が不可欠である。	週2回
		スペイン語Ⅱ	スペイン語の初級レベルの科目である。基本単語を活用して、動詞の変化を習得するための基本的なスペイン語の文法を学ぶ。文法の学習では、初級文法（直接法）を修了する。授業の前半では、文法を中心に解説し、後半は日本語の文をスペイン語にする作文練習問題を各自があらかじめ用意し、黒板にでて発表するといった演習形式で授業を進める。毎回の授業では、相当量の宿題が課される。他の外国語と比べ発音が日本人にとって平易なスペイン語の学習は、自学をしやすい言語なので、授業外学習の課題を積極的に提供する。	週2回
		スペイン語Ⅲ	スペイン語IとIIの履修を終えて、文法事項の学習をひと通り終えた学生を対象に、中級レベルを目指した学習を開始する科目。特に、スペイン語の文章理解において、直説法現在形の把握が重要になることを、日常で直面する文章表現を教材に用いながら、繰り返し学習する。新聞や雑誌で使用される、日常生活の中での使用頻度が高い語彙を選び、それらが実際に短い文の中でどのように使用されているかを解説する。さらに、それらに対する自身の意見や感想を、簡単な構造の短い文章で表現する練習を行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	スペイン語Ⅳ	スペイン語IIIの履修を前提として、スペイン語の文法学習の仕上げを目的とした科目。新聞や雑誌で扱われる具体的な話題に関する議論の内容が大体つかめる程度の読解に必要な文法事項について、具体的な文章を解説しながら説明していく。毎回の授業の前半はこのような文法の説明にあて、質疑応答を通じてその理解を深める。後半は演習を中心に、各自があらかじめ用意したスペイン語作文を黒板で発表してもらい、さまざまな表現の微妙なニュアンスの違いを解説する。	
		スペイン語Ⅴ	スペイン語IとIIの履修を終えて、文法事項の学習をひと通り終えた学生を対象に、中級前半レベルを目指して、主に会話と聞き取りの学習をする科目。日常生活や旅行で遭遇する具体的な状況に、過去形・現在形を用いて、会話する練習を行う。決まった状況における定形的な表現に加えて、日常生活で直面する様々な会話表現を題材に用いながら、必要な文法事項を繰り返し学習する。日常生活の会話で使用頻度が高い語彙を選び、それらが実際に短い表現の中でどのように使用されているかを解説する。さらに、自身の意見や感想を、短い会話で表現する練習を行う。	
		スペイン語Ⅵ	スペイン語Vの履修を終えた学生を対象として、中級後半レベルの会話力を養成する科目。日常生活や旅行で遭遇する大体の状況において、相手の会話を理解し、自身の意図や意見を伝えることができるようになる。さらに、身近な話題だけではなく、自身が興味を持っている分野や既知の話題については、ある程度抽象性のある会話を通じて情報収集を行う練習をする。授業は基本的に全てスペイン語で行うことにより、スペイン語を聞き、話す機会を多く確保する。さらに、スペイン各地の話題を通じて、スペイン語だけでなく、スペイン文化に関する知識も深める。	
		イタリア語Ⅰ	日本人の若者にとってイタリアは、料理、サッカー、ファッション、芸術、そして音楽などを通じてとても身近です。イタリア語Ⅰでは、このような魅力的で人気のあるイタリアの文化を理解しながら、入門イタリア語を楽しく学びます。イタリア語のアルファベットの発音は、日本語のローマ字読みに近いので、初学者にも学びやすいでしょう。授業では、基本的な発音練習からはじめて、基本的な文法事項を中心に、学生が楽しみながら参加できる練習をたくさん行います。	週2回
		イタリア語Ⅱ	イタリア語Ⅱでは、魅力的で人気のあるイタリアの文化を理解しながら、初級イタリア語を楽しく学びます。発音に関しては、これからさらにイタリア語を学んでいくためにも、完全にマスターするまで練習を繰り返します。加えて、基本文法によって成り立つ基本的な日常会話のスキットを作り、ペア・グループワークを通して、学生が楽しみながら参加できる練習をたくさん行います。また、毎週10の単語の暗記を課題として出し、授業のはじめに小テストを行い、知識の定着をはかります。	週2回
		イタリア語Ⅲ	この科目は、より進んだ文法を勉強しながら、ボキャブラリーを増やしていくことを目標とします。1週間に単語20の暗記を目標に、毎週の小テストで確認していきます。もちろん、ただ単語を暗記するというのは、実際の語学学習ではかなり根気の入る作業です。ですので、授業で行うかんたんなリーディングのワークを通して、そのなかから新出単語を20選び出して覚えるようにします。文脈のなかでボキャブラリーを位置づけることで、リーディングの力の向上もはかります。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	イタリア語Ⅳ	イタリア語Ⅳでは、イタリア語作文を中心に勉強していきます。作文といっても、身構える必要はありません。それまでの入門レベルや初級レベルの文法的理解があれば、日常的な基本的な作文はできるようになります。授業では、起床してから就寝するまでの、自分の一日の行動を振り返り、それらを簡単な文法を用いて文章にする練習などを通して、基本的な作文のコツを学んでいきます。作文は、逆に文法理解の定着を促すことにもなります。	
		イタリア語Ⅴ	イタリアの語のリスニングは、最初は早口で戸惑いますが、アルファベットの発音が日本人には親しみやすい面もあり、練習を重ねれば必ず修得ができるものでもあります。イタリア語Ⅴでは、このリスニング力を集中的に鍛える授業となります。題材は、イタリアのテレビや映画、ニュース放送、ドキュメンタリーなどを主に用います。映像を手助けに、まず全体で何を話しているのか、大まかな趣旨を聞き取る力を伸ばしていきます。そのうえで、いくつかのQ&Aシートを用いて細部を聞き取る練習をします。	
		イタリア語Ⅵ	イタリア語Ⅵは、とくにイタリア語を実際に話せるようになりたい、日常会話が出来るようになりたいと望む学生向けの科目です。授業は、できるだけイタリア語を用いて行い、学生のみなさんも、はじめはたどたどしくも、できるだけイタリア語で返答をすることを望みます。たとえば、旅行などですぐに使える実用的な会話と表現を、実際にクラスメートと会話しながら着実に学びます。ペア・グループワーク、スッキト作りなど、学生が楽しみながら参加できる練習をたくさん行います。	
		ハングルⅠ	本学では韓国の大学への派遣留学制度があり、隣国友好の扉が広く開かれています。ハングルの学習を通して、外国語を学ぶ楽しさと大切さを感じてほしいと思います。 この科目ではハングルを初めて学ぶ学生を対象に、最初の一歩から始めます。ハングルの母音と子音を学び、基礎的な発音と会話を学習します。基本文型と単語を繰り返し学ぶことにより、実践的な会話を身につけるようにします。授業では単語や文型などを中心に学習した事項について、確認と定着のために小テストをします。	週2回
		ハングルⅡ	本科目の目的は実際のコミュニケーションに役立つ実用的な韓国語の習得であり、そのための基礎となる文法体系の学習である。ハングルは日本語と語順が同じで、他の外国語に比べて、特にその文法は非常に学びやすい半面、発音は大きく異なっている。本科目では、ペアー学習法を用いて、徹底した発音練習・文法体系の理解を図る。決まり文句を用いて様々な場面で挨拶ができ、事実を伝えあうことができるレベルが到達目標である。さらに、韓国語表現を通して、韓国文化に対する理解も深める。	週2回
		ハングルⅢ	本科目では、ハングルIとIIを履修した学生を対象として、中級前半レベルの韓国語の修得を目指し、日常的なハングルの教材を用いて、特に「読み」「書き」を中心に学習する。自身で辞書を引き、知らない単語の意味を調べて、比較的まとまった内容を持つ文章を読む。さらに、ハングル特有の連語や慣用句についても、学習を開始する。比較的使用頻度の高い1000語程度の単語を覚える。授業内で、単語（語い）、文型などについて適宜小テストを実施して、定着を図る。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	ハングルⅣ	本科目では、ハングルIIIを履修した学生を対象として、「読み」「書き」の能力において、中級後半レベルの韓国語の養成を目指す科目である。韓国の新聞、雑誌等の記事を教材とする。韓国語は日本語と似ている半面、大いに異なる表現を用いる場合も多く、そのような違いの学習を通して、言葉としてのハングルに対する理解と共に、韓国の人々の考え方や表現法の違いを学ぶ。文章表現においても、単語だけではなく、使用頻度の高い慣用句やことわざを使用した表現を学ぶ。授業内で、適宜小テストを実施して、定着を図る。	
		ハングルⅤ	本科目では、ハングルIとIIを履修した学生を対象として、中級前半レベルの韓国語の修得を目指し、日常的なハングルの教材を用いて、特に「聞き」「話す」能力を中心に養成する。初級レベルのハングル学習者にとっての最大の難関は、日本語とは全く異なるハングルの発音の聞き取りである。特に、前後の単語のつながりによる発音の変化（リエゾン）の理解は、実際の表現を音読し、聞き取ることでしか修得できない。そのため、本科目では、特に韓国の実際のテレビやラジオ番組等の聞き取り練習を毎回行い、その都度必要な文法や語彙の解説を行い、適宜小テストも実施しながら、ハングルの理解力の定着を図る。	
		ハングルⅥ	本科目では、ハングルVを履修した学生を対象として、中級後半レベルの韓国語の聞き取りと会話能力の養成を図る。特に会話表現においては、敬語表現や、逆に親しみを込めた打ち解けた表現、婉曲な依頼表現など、相手を意識した表現方法について学ぶ。敬語や婉曲な表現が数多くある点で、ハングルは日本語と似ているが、その適切な選択には、韓国人の価値観や文化への理解が不可欠である。ハングルという言語の学習を通じて、異文化の理解と寛容性を修得することも、この科目の大きな狙いである。	
		ロシア語Ⅰ	ロシア語をゼロから学びたい方を対象とする入門授業です。本学は留学制度などを通してロシアとの交流を深めてきた歴史があります。地理的にも日本と近く、政治経済の関係も深い国として、これからもいっそうの関心と理解を深めていきたい国でもあります。この授業では、そうした関心を持ってロシア語を勉強したいという学生に開かれています。まずは、あまり馴染みのなりロシア語のアルファベットを読み書きができ、基本的な文法を理解できるようになることが目標です。	週2回
		ロシア語Ⅱ	ロシア語Ⅱは、ロシア語のアルファベットをマスターしたうえで、本格的にロシア語を学んでいきたいと望んでいる学生のために、初級ロシア語を修得できるように構成されています。習うより慣れよといわれますが、この授業では、日常的な場面を通して、たとえば、自己紹介や家族について、友人について、大学についてといったテーマでの簡単なスキットを通して、読み・書き・聞く・話すの初級を身につけることができるようになることを目指しています。	週2回
		ロシア語Ⅲ	ロシア語Ⅲは、中級レベルの読解ができるようになることを目指しています。受講者全員、予め指定したテキストを訳したものをレポートとして毎回提出し、授業時にこれを皆で点検しながら、ロシア語の文章を読解、訳出する際に注意すべき事柄を学ぶというかたちで授業を行います。使用テキスト（プリント配布）は、Ирина Курлова "Приключения иностранцев в России". です。丁寧に辞書を引きながら、一文一文の文法や文と文のあいだの構造をしっかりと理解したいと思います。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第２外国語）	ロシア語Ⅳ	ロシア語Ⅳでは、ロシア語作文を学びます。いうまでもなく、いきなりすらすらと文章がかけるわけではありません。まずは基本的な文法事項がしっかりと定着できるかどうかが大切です。授業では、たとえば「学校へ行く」といった日常的なテーマを取り上げて、きわめて簡単な文章からはじめて、次第に長い説明文が書けるようになるよう学習を深めていきます。そのなかで、関係代名詞や形動詞、副動詞等を多用した複雑な構文を用いた複雑な文章も書けるようにトレーニングしていきます。	
		ロシア語Ⅴ	ロシア語Ⅴは、ロシア語のリスニング力をとくに鍛えたいと思っている学生に履修してもらいたい授業です。ロシア語のシャワーを浴びるという具合に、毎回ロシアの映画鑑賞を行ったり、ロシア人のゲストやロシア関係で活躍する卒業生に来てもらい、ロシアについて話を聞く機会を設けたいと思います。もちろん、ロシア語で話を聞くわけでして、学生のみなさんは、画面を通してだけでなく、実際に目の前で話している生きた会話を聞き取ることができるようになります。	
		ロシア語Ⅵ	ロシア語Ⅵは、ロシアを語を実際に話せるようになることを目標としています。モノローグや、ダイアローグ、ディスカッションなど、さまざまな練習方法がありますが、お天気や映画、スポーツ、演劇、日本やロシアの奥に事情など、さまざまなトピックを通して、いろいろな表現方法を学びます。時事問題など複雑な話も時々取り入れて、日常会話だけでなく、自分の「意見」を述べる練習も行いたいと思います。話す練習は何より環境が大事なので、授業は基本的にロシア語のみで行います。	
	言語科目（日本語）	日本語ＡⅠ	初級前半レベルの科目。日本語のひらがな、カタカナ、漢字を区別でき、約200字の漢字を覚える。限られた文型を用いて作られた文章を読んだり聞いたりして理解する。決まり文句としての挨拶と簡単な質問、並びにそれらに対する応答の仕方を学ぶ。自分自身や家族の名前を紹介し、自身の特徴や好きなもの・嫌いなものなどに関する私的な話題について、簡単な会話をすることができるようになる。自身の日課や予定、自身に直接関わる身近な事実について、簡単な文章で伝達できるようになる。	週2回
		日本語ＡⅡ	初級後半レベルの科目。比較的使用頻度の高い約400字の漢字を覚え、その漢字を用いた簡単な文を読み書きできるようになる。決まり文句を用いて様々な場面で挨拶ができ、食事の注文や簡単な買い物などの際に用いる定形化された依頼をしたり、簡単な誘いをしたりする表現を学ぶ。自分で辞書を引き、未知の単語の意味を調べられるようになる。頻繁に用いられる連語についても一定の理解をする。メモ文書や広告などの短い文章について理解し、必要な情報を得られるようになる。	週2回
		日本語ＢⅠ	中級前半レベルの学習を開始する科目。約800字の漢字を理解し、文章の中で漢字が果たしている役割に対する知識を身に付け、漢字を文章の中で適切に使えるようになる。私的で身近な話題だけではなく、自身が経験的に詳しい社会的出来事について、会話や文章表現で話題にできるようになる。事実関係について正確に伝えることができ、初対面の相手やあまり親しくない相手に対して、依頼や誘いに加えて、指示・命令、依頼や誘いの受諾や拒否、余暇の接受など、様々な意図を表現できるようになる。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（日本語）	日本語ＢⅡ	中級前半のレベルの学習を完成させる科目。約1000字の漢字を理解し、文章の中で漢字が果たしている役割に対する知識を身に付け、漢字を文章の中で適切に使えるようになる。決まり文句以外の表現を用いて挨拶を交わせるようになる。それぞれの単語だけではなく、使用頻度の高い慣用句、ことわざなども理解し、使用することができるようになる。日記や手紙などの比較的長い文章や、内容的にまとまりを持った文章を読んだり聞いたりして、その大意をつかむことができるようになる。文章や会話の中で用いられる接続詞や指示語の意味を正確に解釈し用いることができるようになる。	
		日本語ＣⅠ	中級後半レベルの学習を開始する科目。約1200字の漢字を理解し、文章の中で漢字が果たしている役割に対する知識を身に付け、漢字を文章の中で適切に使えるようになる。頻繁に用いられる単語や文型については基本的に自ら使用でき、内容が比較的平易なものであれば、ある程度長い文章であってもその内容を正確に理解できるようになる。また、広告やメモ書きなど、様々な脈絡で用いられる特殊な短い表現についても、その情報を把握できるようになる。	
		日本語ＣⅡ	中級後半レベルの学習を完成させる科目。約1300字の漢字を理解し、文章の中で漢字が果たしている役割に対する知識を身に付け、漢字を文章の中で適切に使えるようになる。丁寧語だけではなく、相手を意識した表現を選択し、特に親しい相手に対して適切な表現を用いてコミュニケーションを図ることができるようになる。さらに、依頼や指示の意図を実現する際に婉曲的な表現を用いるなど、コミュニケーションの目的実現ための様々な表現を学ぶ。数多くの慣用句やことわざの意味を理解し、自身の表現の中で使用できるようになる。	
		日本語ＤⅠ	上級前半（日本語能力試験N2レベル）の学習を開始する科目。約1600字の漢字を理解し、文章の中で漢字が果たしている役割に対する知識を身に付け、漢字を文章の中で適切に使えるようになる。丁寧語と尊敬語と謙譲語の違いを理解し、相手を意識して適切な敬語表現によるコミュニケーションを図ることができるようになる。論旨が明快な文章で、社会的常識の範囲内にある話題について述べられている新聞記事などを読んで、その意味を具体的に把握できるようになる。	
		日本語ＤⅡ	上級前半（日本語能力試験N2レベル）の学習を完成させる科目。約1900字の漢字を理解し、文章の中で漢字が果たしている役割に対する知識を身に付け、漢字を文章の中で適切に使えるようになる。公式な場面と非公式な場面の区別に即した適切な表現の選択方法を学ぶ。使用頻度の高い四字熟語を理解し、使用できるようになる。まとまった内容を持つ比較的長いTVのニュース、ドキュメンタリー番組や教養番組等を用いて、全体の流れや論理構成を把握し、話者の主張を理解し、重要な発話の部分を書き取り、内容を要約し、説明する練習を行う。	
		日本語ＥⅠ	日本語能力試験対策（N1レベル）。世界的な言語能力基準CEFRに沿い、日本語能力試験も大きく改訂された。日本語能力N1で求められる「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」能力、課題遂行のためのコミュニケーション能力の習得が求められる。具体的には試験科目である言語知識の漢字読み、表記、語形成、文脈規定、類義、用法、文法形式の判断、更に、読解の内容理解（短文、中文、長文）、統合理解、主張理解、情報検索など多岐に亘る日本語能力の向上、聴解においては、課題理解、ポイント理解、概要理解、即時応答、統合理解などの能力の向上を図ることが求められる。授業においては、特に文法・読解を中心に日本語の総合力の向上を目指すとともに、聴解力においては、どんな部分が補うべきものかを明確にし、Ｎ１試験に臨み高得点が取れる実力をつけていきたい。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（日本語）	日本語ＥⅡ	授業概要（＊）日本語能力試験対策（N1）対策。ストラテジーを意識し多岐にわたる試験問題のタイプに対応できる能力の向上を図る。試験科目である言語知識（文字・語彙・文法）、聴解、読解の様々なパターンである内容理解（短文、中文、長文）、統合理解、主張理解、情報検索など、オールマイテイな日本語能力を養成する。	
		日本語ＦＩ	大学では、日本語で研究分野の専門書を読んだり、さまざまな資料から情報を得たりすることが多いが、そこで必要とされる読解のストラテジー（戦略・方略）を使った読み方を学ぶと、文章を読む力を更につけることができると考えられる。この授業では、各課のテーマに沿って、留学生に必要とされる読解のストラテジーを学ぶ。 教科書は７課からなるが、２回の授業で１課を終える。１回目は各課の本文と実践問題をし、２回目は演習をする。演習は前週学んだストラテジーを使った読み方を確実に身につけられるような問題を解く。また、毎回（２回目以降）小テストを行い、本文・実践で学んだ語彙や表現の定着を図る。	
		日本語ＦⅡ	「日本社会の現状を反映」［学習者が母国の状況と関連させてとらえることのできるもの」「学習者が感想・意見をもてるもの」等の観点から選択された文章を読み、それらを通して日本への理解を深める。　「少子高齢化社会」［教育」など、大きい６つのテーマの中に、それぞれ４～６つの文章があり、適宜選択し、毎週一つずつ本文の内容理解、語彙・表現練習等を行う。	
	言語科目（第３外国語）	ポルトガル語Ⅰ	ポルトガル語は、世界8カ国、すなわちブラジルとポルトガルのほか、アンゴラ、モザンビークなどアフリカの5カ国、そして、アジアでは東ティモールで公用語として話されている言語です。 ポルトガル語の講義では、これらの国の中で、現在、BRICsの一角として、成長目覚ましいブラジルのポルトガル語について、基本的な文法事項を中心に学習していきます。	
		ポルトガル語Ⅱ	サッカーやブラジル音楽に加えて、日本に住む多くのブラジル人の存在によって、日本の中でのポルトガル語の重要性も高まってきています。本講義では、挨拶や基本的な文の作り方、簡単な日常会話に必要な表現などを身につけていきます。特に、ポルトガル語のアクセントやイントネーションを正しく身につけられるようにトレーニングをしていきます。	
		ポルトガル語Ⅲ	本講義では、さらにポルトガル語の基礎力を身につけるための学習を進めていきます。動詞の現在形を中心に、表現力をさらにつけていきます。	
		ポルトガル語Ⅳ	本講義では、さらにポルトガル語の基礎力を身につけるための学習を進めていきます。過去の表現に焦点を当てた学習をすることによって、表現力をさらにつけていきます。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第３外国語）	アラビア語Ⅰ	アラビア語が、国連の公用語の一つであることを知る人は、きわめて稀です。我が国では、この言語を教える機関がとりわけ少ないのも、こういった無認識を生む要因でしょう。　さらにアラビア語が世界の言語のうちで、最も難解な言葉の一つに数えられている理由は、ある独特なヘビのくねったようなアラビア文字に象徴されるのではありません。難しいとされるのは、この言語が有する文語・口語二つの文法の著しい相違です。そのため当初から文字と音声をまったく別のものと考え、文法と会話を並行して学ぼうと思います。したがってテキストも、口語と文語の２冊を使用します。　なお毎回の授業に際しては、２～３時間程度の宿題が課されます。授業の前半では、各自が直面した問題点を述べていただき、その解決に十分な時間を割り当てる予定です。年間を通して一度も欠席しないという心構えで、授業にのぞんでください。	
		アラビア語Ⅱ	アラビア語の基礎文法を学びます。カセットによる聞き取りを重視し、日常会話で使われる基本的な会話文も併行して学習します。各週ごとに学習した文法事項に対応する次回の演習問題で、その理解度を確認しましょう。前期の単語帳をしっかり整理して、授業に臨んでください。	
		アラビア語Ⅲ	アラビア語をすでに履修した諸君に履修してもらいたい中級文法の講座です。各自が用意してきた課題を黒板に発表し、その問題点をじっくり時間をかけて解決していきます。随時カセットによる聞き取り練習を導入して、アラビア語を「聞いて理解する」力を養うことも目標です。	
		アラビア語Ⅳ	アラビア語における「法」と「態」が中心となるが、アラビア語文法の最難関といわれる「動詞派生形」についても随時解説したい。古典アラビア語の知識を拠り所として、 現地で戸惑うことのない程度まで、 アラビア語の読解力や作文の能力を高めるのがその目的である。 数年前からはエジプトのカイロなどをはじめとして アラブ諸国への留学を希望する学生も急増していることなどから、アラビア語の口語文法についても、随時解説していく。	
		スワヒリ語Ⅰ	アフリカ各国にはたくさんの部族語が存在することがよく知られているが、中でも“サファリ”とか“ジャンボ”という単語で世界に知られるスワヒリ語は、タンザニアやケニアを中心に東アフリカで広範囲に話されている言語である。名詞が８種類に分かれ、夫々が主辞をもち、形容詞は名詞に合わせた接頭辞がつくこの言語は、文法的にはいささか難しいが、文字はローマ字で書ける上に、母音が多いので日本人には発音しやすく学びやすい。本科目では、とくに文型を覚え、語彙を増やしていくことに取り組む。	
		スワヒリ語Ⅱ	本科目は、スワヒリ語Iの履修を前提とする。スワヒリ語は発音に即して表記されることが多く、基本的な表現を知っているだけでもコミュニケーションに十分役立つ。本科目では、日常会話や旅行の際にしばしば用いられる基本的な言葉、便利な挨拶など、実際の場面で使用できる表現を多く学習し、それらを発音できるよう訓練する。ケニアなど、日常語としてスワヒリ語を、ビジネスの場では英語を用いている国では、旅行者が少しスワヒリ語を知っていると非常に喜ぶため、本科目での学習を通して、簡単な日常会話で東アフリカの人々と交流できることを目指したい。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第３外国語）	スワヒリ語Ⅲ	本科目は、スワヒリ語I-IIを履修しているか、または既に何らかの形でスワヒリ語を学んだ事のある学生を対象とする。文法の基礎を改めて復習しながら、簡単な日常会話の表現から一歩進んで、より正確なスワヒリ語の語学力を向上させる。 本科目では、会話力とともに読解力を重視し、そのために単語数を増やすことも重要となる。東アフリカ事情について書かれた簡単な新聞記事などが読めるように指導し、語学力のみならず東アフリカの知識を増やすことで、現地の人々との交流に役立つようにする。	
		スワヒリ語Ⅳ	本科目は、スワヒリ語IIIの履修を前提とする。本科目では、単語力と読解力の強化を引き続き図るとともに、スワヒリ語によるより的確な表現力も訓練したい。具体的には、毎回の授業で、使用する教材の各章に出てくる単語を用いて、学生が自由作文をしてそれを発表する。さらに、学士同士が相互にその文を読みあうことを通して、各人の聴解力も向上させたい。本科目ではまた、適宜、東アフリカ事情についても織り交ぜて紹介し、歴史、文化、社会、政治経済といった多様な面での知識を増やすことで、東アフリカの人々との交流に役立つように努力する。	
		タイ語Ⅰ	タイは、日本にとって経済的にパートナーとして近年重要性が増している国である。タイ語初級の本科目では、タイの現地語であるタイ語の基本的な発音、文法理解をベースに日常会話を指導していく。本科目では、日本語や他の言語とは異なるタイ語の特殊な発音方法と、文法の基礎を学んでいく。またそれが学びやすいように、簡単な日常会話の学習を通じて、自然に身につくよう指導していく。具体的にはタイ語の単語を500語以上覚え、それを用いて、正確な発音と文法に則り、会話に活用できるようにしていく。	
		タイ語Ⅱ	本科目では、タイ語Iで中心的に学んだタイ語の基本的な発音・文法理解をベースにして、日常会話の学びを更に進めていく。具体的には、本科目の授業では新たな単語を400語以上追加し、発音方法と文法の基礎への理解を、着実に深めていく。会話の教材として扱う内容も、より実践的な会話に焦点をあてていく。本科目を通じて、学生がある一定程度の日常会話をマスターできるように指導していくとともに、タイという国の歴史・文化・経済等に関する学生の知識と理解も深めたい。	
		タイ語Ⅲ	本科目では、タイ語I-IIで中心的に学んだタイ語の基本的な発音、文法理解をベースに、中級レベルでのタイ語会話ができるよう学びを進めていく。具体的には、それまで学んだ900語程度の単語数に対して、本科目の授業を通じて新たな単語を300語以上追加し、段階的に、発音方法と、より高度な文法の理解を深めていく。会話で扱う内容も、以前よりも汎用性の高いものに焦点をあてていく。本科目の授業を通じて、正確な発音と文法に則り、タイ語のより実践的な表現ができるよう指導していく。	
		タイ語Ⅳ	本科目では、これまでタイ語I-IIIで中心的に学んだ初級・中級レベルのタイ語を土台として、発音、文法、会話のいずれの面でもより高度なレベルでのタイ語会話ができるよう、学びを進めていく。それまで学んだ1200語程度の単語数に対し、本科目の授業を通じて、新たな単語を500語以上追加し、より高度な会話表現ができるよう指導していく。授業中に扱う内容も、さらに実践的で汎用性の高い会話にレベルをあげていく。本科目を通じて、正確な発音と文法に則り、より高度で実践的な表現ができるよう指導していく。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第３外国語）	トルコ語Ⅰ	トルコ共和国の公用語であり、シルクロードの「国際語」でもあるトルコ語は、広範囲にわたって使用されている言語である。本科目では、まずトルコ語の基本文法を修得した後、簡単な文章の読解に取り組んでいく。語学修得の学びと並行して、現在のトルコの政治情勢の解説、ビデオ鑑賞やトルコ語の歌などを通じて、トルコや激動する中東イスラーム社会に対する正しい理解を深めていく。本科目ではまた、トルコ留学経験者やトルコ人にもゲストとして来てもらい、実体験に基づいたさまざまな話をしてもらう。	
		トルコ語Ⅱ	本科目では、トルコ語Iの授業で培った学びを基礎として、トルコ語文法の基礎に習熟し、簡単な文章を理解することができるまで、運用能力のレベルを高めていく。会話については、「あいさつ」に始まり、簡単な日常会話もある程度できるよう指導していく。また、本科目でのトルコ語の修得を通じて、語学面のみならず、非常に豊かなトルコの歴史、社会、文化、経済への関心を喚起するとともに、また日本とトルコのさらなる交流の可能性や、その方途などについても、この科目を通じて考えていきたい。	
		トルコ語Ⅲ	本科目では、トルコ語I-IIで扱った基本文法をふまえて、中級レベルのトルコ語文法を修得し、平易な文章のみならず、小説、新聞記事などのさまざまな文章の読解を中心に学んでいく。また、日常会話練習やトルコの歌、ビデオ教材等を利用して、文法のみならず生きたトルコ語に親しむことにも留意しながら、トルコ語の学習を行なっていく。さらに本科目では、適宜、トルコや中東、イスラームの歴史、社会、文化を紹介し、語学修得とともに他文化理解の深化ができるよう授業を展開していく。	
		トルコ語Ⅳ	トルコ語I-IIIの履修を前提として、本科目では更に高度なトルコ語文法を修得し、小説や新聞記事等だけでなく、学術論文などの高度な文章の読解もできるよう指導していく。これらを通して、トルコや中東、イスラーム世界の歴史や政治経済に関する、トルコ語で書かれた専門的な文献がある程度読めることになり、日本語ではなかなか紹介されない情報からイスラーム社会を知ることにつながる。また同時に、生きたトルコ語に親しむという点はやはり重視し、日常会話のブラッシュアップや、歌やビデオ等を利用した学習も、引き続き授業の中に織りこんでいく。	
		ブルガリア語Ⅰ	スラヴ語派は、インド・ヨーロッパ語族を形成する有力な語派のひとつである。スラヴ語派には、東スラヴ諸語・西スラヴ諸語・南スラヴ諸語があり、ブルガリア語は南スラヴ諸語のひとつに位置づけられる。本科目では、ブルガリア語の学習の手始めとして初級レベルの文法を学び、その上で、初歩的な会話が聞き取れ、簡単な会話ができるよう授業を行なっていく。またブルガリア語の学習を通じて、語学面のみならず、ブルガリアの地理、歴史等についても理解を深めていく。	
		ブルガリア語Ⅱ	本科目では、ブルガリア語Iの履修を前提として、初級レベルの文法の理解を更に深めていく。またその学習に基づいて、より実践的な日常会話が聞き取れ、実際に学生がある一定程度の会話を行えるようになるよう授業を展開していく。さらに、ブルガリアの風習に関する読み物、歌のテキスト、ビデオ教材等を用いながら、生きたブルガリア語に親しむことを重視する。本科目のなかでは、ブルガリアの文化や社会、風習等を紹介しながら、ヨーグルトやバラで知られるブルガリアの他の魅力についても学びたい。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第３外国語）	ブルガリア語Ⅲ	本科目では、ブルガリア語I-IIで学習した初級文法を復習しつつ、その上で一歩進んだ中級の授業へと進みたい。寺島憲治著『エクスプレス・ブルガリア語』を教材として用い、第１課から第10課まででブルガリア語の基礎的な文法（特に動詞の現在形、人称代名詞等）を再確認する。それを踏まえた上で、単語数の増加やさらなる文法の強化を図っていく。また、バルカン半島に位置するブルガリアの言語に、セルビア語（西スラヴ語群・西グループ）やロシア語（東スラヴ語群）といった他のスラヴ語派との関係についても、学生の理解を深めたい。	
		ブルガリア語Ⅳ	本科目では、ブルガリア語IIIの履修を前提として、寺島憲治著『エクスプレス・ブルガリア語』を一通りマスターすることを目指す。と同時に、これまでのブルガリア語I-IIIで学んできたブルガリアの地理、歴史、文化を踏まえつつ、ブルガリアと周辺諸国を含むスラヴ世界への知識と理解をさらに深めたい。ギリシャ、トルコ、ルーマニア等と国境を接するブルガリアの言語には、アジア系のギリシャ語やトルコ語の要素も入っている。語学習得を通して、多様な文化、民族、宗教を持つ人々が暮らすスラヴ世界の豊潤さについて、学生のさらなる関心を喚起したい。	
		モンゴル語Ⅰ	モンゴル語では、英語でいうアルファベットにあたるツァガーントルゴイがある。本講義では、最初にその暗記につとめ、学習を進めていく上で必要な、辞書が引ける力を養成する。その理解を基に、母音調和、男性語、女性語、中性母音といったモンゴル語独自の規則を正確に学んでいく。また、数詞，　疑問詞有り無しの疑問文の作り方、動詞の過去の接尾辞をしっかり覚える。それらを理解する方法として、簡単な日常会話ができるようになる。また言語の学習の基礎となるモンゴルの習慣、エチケット等についても学んでいく。	
		モンゴル語Ⅱ	モンゴル語Iでは、ツァガーントルゴイを学び、それに基づいてモンゴル語の基礎を学んだ。本科目では、これまでの学習を基盤として、学生が自分で辞書を少しずつ引くことが出来るように、単に単語だけでなく文法も含んだ辞書の引き方ならびに活用の仕方を学んでいく。モンゴル語（キリル文字）は１つの語でも別の意味を持つことがあるので、辞書を使って自分で調べることの楽しさも、本科目を通じて学んでいく。また文法的には、モンゴル語Iで学習した動詞の変化、疑問文の作り方なども活用する。	
		モンゴル語Ⅲ	本科目では、モンゴル語I-IIの履修を前提とし、これまで学んだモンゴル語の基礎の上に立って、すでに辞書の引き方はある程度出来ることを前提として、一つ一つの言葉を自分で辞書を使って学ぶ方法を修得する。これによって、活用できる単語数を増やし、日常会話等に実践的に使用できる能力を養成していく。モンゴル語I-IIでは、母音調和、男性語、女性語、中性母音といったモンゴル語独自の規則を継続的に学んできたが、本科目では、実践的に会話が続けられるように、はなし言葉の言い回し、アクセントを学ぶ。	
		モンゴル語Ⅳ	本科目では、これまでモンゴル語I-IIIを通して学んできたモンゴル語の基礎知識を土台として、自ら辞書を使いこなせるようになり、活用できる単語数を増やし、日常会話等に実践的に使用できる能力を養成していく。モンゴル語IIIでは、実践的に会話が続けられるように、はなし言葉の言い回しやアクセント等を学んだが、本科目では、これまでの積み重ねを確認した上で、更に動詞の使役形、再帰語尾、第何番目の～という言い方、四季の挨拶、「トイレに行く」の婉曲な言い方など、全体のレベルアップをはかる。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第３外国語）	インドネシア・マレー語Ⅰ	インドネシア共和国の国語であるインドネシア語は、アルファベット表記であること、語順などの文法事項の制約が少ないこと、発音に母音が多いことなどから、日本人が習得しやすい外国語の１つであるといわれている。本科目の目的は、インドネシア語の初歩的な文法や平易な会話表現の習得にある。毎回、冒頭に小テストを行うので、必ず事前準備をして授業に臨む必要がある。本科目では、言語学習とともに、インドネシアの歴史、社会、文化の一端を学ぶことができるよう、適宜ビデオなども視聴する。	
		インドネシア・マレー語Ⅱ	インドネシア・マレー語Iでは、インドネシア語の初歩的な文法や平易な会話表現について学んだ。本科目では、インドネシア・マレー語Iの履修を前提に、更に基礎をしっかり確立し、これまでの１年間の学習でインドネシア語技能検定試験E～D級の合格ができるようなレベルまで、語学の訓練を行なっていく。特に、本科目では、インドネシア語の基礎文法と必須単語を追加的に習得し、現地での旅行や生活で役に立つ簡単な日常会話と、より正確な読解ができるようになることを目標とする。	
		インドネシア・マレー語Ⅲ	インドネシア・マレー語IからIIでは、インドネシア語の初歩的な文法や平易な会話表現について学んだ。本科目では、インドネシア語の基礎文法を習得し、一歩進んだコミュニケーションや文献読解ができるようにしたい。インドネシア・マレー語Iから本科目にかけての学習をもって、インドネシア語技能検定試験E～D級に合格し、それ以上の級に挑戦できるようなレベルまで、語学運用能力を高めていく。具体的には、人称代名詞・所有格と所有代名詞・否定語・未来、完了、進行の助動詞・接頭辞のつかない動詞についても学ぶ。	
		インドネシア・マレー語Ⅳ	本科目の目的は、インドネシア・マレー語I-IIIの学習をふまえて、受動態をふくめたインドネシア語の基礎文法を習得することで、日常的なコミュニケーションのみならず、文学作品などのより精確な読解ができるようになることを目標とする。９回目の授業では、インドネシアの国民的歌手 Iwan Fals （イワン・ファルス）の歌詞の解釈をする。10～15回目の授業では創立者の『少年と桜』のインドネシア語版 ″Pohon Sakura″ の読解を行う。本科目の修了時には、インドネシア語技能検定試験C級の合格ができるような学習をめざす。	
		言語演習Ⅰ	セルビア・クロアチア語の言語系統は、インド・ヨーロッパ語族のスラヴ語派、南スラヴ語に属する。そのため、その単語や文法は、ロシア語、ブルガリア語など他のスラヴ系言語とよく似ている。この演習では、なるべくすぐに使える会話テキストを用いて、セルビア・クロアチア語の語彙力を徐々に増やしながら、日常的なコミュニケーションを中心に、会話表現力を継続的に高めていくことを目指したい。そのために、セルビア・クロアチア語特有の規則に注視しながら、基本的な文法項目の着実な学習を進めていく。	
		言語演習Ⅱ	大国に挟まれた地政学的特徴から、国家としては興隆と衰頽を繰り返したポーランド。現在ではEU加盟国となっているポーランドは、日本企業からの投資も急増し、ポーランド語力を備えた日本人への需要もいよいよ大きくなっている。本科目ではポーランド語初級として、ポーランド語の発音・アルファベットの習得、数詞の理解などを通して、日常生活でのコミュニケーションに必要な基礎会話を学んでいく。また、語学の学習を通じながら、ポーランドの歴史、文化、政治経済についての基礎知識の獲得も目指す。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	言語科目（第３外国語）	言語演習Ⅲ	日本人の若者にとってイタリアは、料理、サッカー、ファッション、芸術などを通じてとても身近である。本科目は、魅力的で人気のあるイタリアの文化を理解しながら、イタリア語を楽しく学び、日常会話が出来るようになりたいと望む学生を対象としている。アルファベットの発音から、旅行などですぐに使える実用的な会話と表現を、実際にクラスメートと会話しながら着実に学ぶ。そのために、ペア・グループワーク、スキット作りなどの手法を取り入れて、学生が楽しみながら参加できる練習をたくさん行っていく。	
		言語演習Ⅳ	ポルトガル語は、世界８か国、すなわちブラジルとポルトガルのほか、アンゴラ、モザンビークなどアフリカの５か国、そしてアジアでは東ティモールで公用語として話されている言語である。本科目では、ポルトガル語をはじめて学習する学生を対象に、挨拶や基本的な文の作り方、簡単な日常会話に必要な表現などを身につけていく。特に、ブラジルのポルトガル語のアクセントやイントネーションを正しく身につけられるように、授業内でトレーニングをしていく。前期の最後の授業では、学習した表現を使い、ポルトガル語で自己紹介をする練習を行っていく。	
	健康・体育科目	体育実技Ⅰ	卓球は、学校体育では中学・高校の実技の選択種目として取り上げられている。本科目の卓球授業では、主として毎回の授業を、基本的な練習と技術レベル別の試合という形式で行っていく。初心者は基本的なスキルの習得、中級者は一段高いレベルのスキルの習得、上級者には初心者及び中級者のサポートとともにスキルを磨いていくことを目的とする。ダンス授業では、幅広いダンスの領域から主に基礎的な要素を選び、具体的にはボールルームダンスを軸として、リズムと動きを学ぶ。柔道授業では、教養的分野の観点にたって、学習者のニーズに応えることを主として授業を展開していく。	
		体育実技Ⅱ	バスケットボール授業では、フィットネスの向上、個人スキルの獲得向上、コミュニケーション・スキルの獲得向上、チーム・ビルディングの体験理解、リーダーシップのスキルの獲得などを念頭に置いて、バスケットボールを実践的に学ぶ。テニス授業では、世界的に広く普及している（硬式）テニスの実技を通して、自己の心身に関する自覚的認識を高め、合理的な運動技能とコミュニケーション能力、心理的な能力の開発に努める。また、審判法や技術の変遷など、テニスの文化的背景について考察する機会をもつ。スケート授業では、フロアースケートというインラインスケートを着用し、運動能力（滑る感覚）を開発することを目的とする。	
		体育実技Ⅲ	ソフトボール授業では、実技を通じて学生個々人の身心両面の健康をはかり、社会的・集団的スポーツとしての要素・要件を有する内容をも併せて再吟味して、自己の内に教養として取り入れる。 フィットネス授業では、様々な身体活動・運動の多面的効果、即ち身体・心理・社会的効果をねらいとした総合的な授業（講義・実技）を展開する。ライフスタイルの改善をはじめ、生涯健康を目指す基礎的知識と実技を含めた能力を習得する。剣道授業では、剣道の持つ本来の美しさを学ぶために、姿勢づくりならびに古流剣術の技を習得していく。合理的な剣の使い方や体さばきなどの基本動作を経て、技の冴えと美しさを学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	健康・体育科目	体育実技Ⅳ	バレーボール授業では、戦術とルールに則ったバレーボールを実践することで、チームにおける個人の能力の活かし方やリーダーシップのあり方について学ぶ。サッカー授業では、サッカーの実践、フィットネスを高めるための運動実践、さらにこれらを具現化し持続させる核となるコミュニケーション・スキルのトレーニングを行なう。バトミントン授業では、大学生活における学生の身心両面の健康を第一にはかることを目的として授業を実施する。マナーを重視し、前半（４回目授業）までは基礎技術を中心にした授業を行ない、５回目以降の授業は試合中心に授業を進めていく。なぎなた授業では、日本の伝統的武道であるなぎなたの幅広い運動文化を、理解し習得する機会とする。	
		体育講義Ⅰ	本科目では、教養的分野という観点に立って、具体的なスポーツ事象と深く関係しながら、今日のスポーツ行動における諸種の問題点・課題点を取り上げていく。 また、スポーツを他者と競い合う競技の枠内に限定せず、人類が身体運動能力の限界を超えてきた事例を幅広い視点から学ぶ。更に、「健康に関するアンケート」を実施し、その内容に基づく講義を行なう。具体的には、①平均寿命の推移と死因、②生体成分と栄養素およびエネルギー代謝、③食生活と健康（体脂肪に関する話題）、④食生活と健康（日常の食生活）、⑤日常生活と身体活動、等である。	
		体育講義Ⅱ	本科目は、体育講義Ⅰで学んだ内容をより深める方向で講義を進める。スポーツを他者と競い合う競技の枠内に限定せず、人類が身体運動能力の限界を超えてきた事例を幅広い視点から学ぶ。特に本科目では、「こころとからだ」の健康をテーマに授業を展開し、こころとからだの関連性を心理学ならびにスポーツ心理学の知見を基に解説する。また、大学生の身体特性に留意し、身体運動と健康に関する諸問題、なかでも青年期の身体運動と生活習慣に重点をおく。学生は本科目を通して、生涯健康のための基礎的な運動処方と生活習慣を学ぶ。	
	人文・芸術・思想科目	音楽Ⅰ	本科目では、誰もが一度は聴いておきたいバロック期、古典派、ロマン主義、印象派、近代・現代までのクラシック音楽の傑作を紹介しながら、聞き手の立場とともに作曲家の立場に立って講義していく。数々の名曲を聴きながら、音楽映画の鑑賞を通して、「西洋音楽史」、「音楽通論」、「和声学」、「楽式論」、「楽曲分析」、「音楽鑑賞法」等といった音楽の分野に関連する様々な内容を、本科目を通じて、分りやすく解説し、音楽を総合的に理解できるよう講義を行なっていく。	
		音楽Ⅱ	音楽Iが主にクラシック音楽の傑作を紹介するのに対して、本科目では、私達が日常生活において聴いているポップ・ミュージックや映画音楽などを中心に学ぶ。技術的には、音名、音程、音階、３和音といった基礎講義を踏まえ、言葉とメロディ、非和声音、基本的ケーデンス、主要３和音、副３和音といった技術的な内容を学んだ上で、自ら作曲をしていくための基礎を培う。最終的には、学生が本科目での学習を通じて、８小節から16小節の短いメロディを自分で作曲できるようになることを目標にする。	
		美術Ⅰ	本科目では、古代から近代19世紀に至る期間において、西洋の美術がどのような歴史的変遷をたどってきたかを概観して勉強していく。それぞれの時代を象徴するような美術家に焦点をあてて、その人物について、歴史的、社会的、宗教的な背景を考慮しながら多角的に学んでいく。次に、本科目で取り上げた美術家が作成した著名な作品を何点か取り上げて、なぜこのような作品が生まれ、また評価されているのか、教員と学生同士が相互にディスカッションを行いながら、美術について多岐に渡って学んでいく。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	人文・芸術・思想科目	美術Ⅱ	美術Ⅰが主に古代から近代に至る西洋美術の長期的な変遷を概観するのに対して、本科目では、現代の美術（ここでは20世紀西洋美術をいう）を中心に、代表的作家やその作品を取り上げる。時代＝人間＝美術という視点から、それらの作品が生まれ、評価されてきた歴史的、社会的、宗教的な背景を考慮しつつ、さまざまな運動と解体と変革の20世紀美術を多角的に検証する。それと共に、講義だけではなく、学生各人が作品制作を行なう実習を織りまぜていきながら、美術への理解を深めていく機会を提供していく。	
		文学Ⅰ	自身を取り巻く諸問題に対し、（文学作品の読解を通して）積極的に問いかけ、自ら考察していく態度を養う。本授業で扱う予定の作品候補は、以下の通りである。①二葉亭四迷『浮雲』（リストラされて職を失ったことがもとで、職場の元同僚に婚約者を奪われたら、アナタはどうしますか？）、②夏目漱石『夢十夜』（好きな人はいますか？ その人のことを「100年」待てますか？）、 ③谷崎潤一郎『刺青』（自分を捨て、その奴隷になってもいいと思える位＜美しい＞ものに出会ったことはありますか？）、④志賀直哉『苑の犯罪』（誰かを殺したいと思ったことはありますか？ その人物を殺せるチャンスが訪れたら、アナタはどうしますか？）、⑤芥川龍之介『藪の中』。	
		文学Ⅱ	文学は哲学や心理学と並んで、人間の内面生活に深く分け入り、思想や心理、またそこから発する行動などを描く。ドイツ語圏の文学の世界においても、有名なゲーテを筆頭に、「歓喜の歌」の作者シラー、青春と革命の詩人ハイネなど、古くから我が国でも愛読されてきた詩人が数多くいる。前半はこうした古典的な作家を取り上げる。高度に発達した資本主義国の仲間入りをした19世紀末から、ドイツにおいても社会的な問題という影の部分があらわになっていく。こうした世界でも類のない歴史を歩んだドイツ人たちは、そのそれぞれの過程で、多くの重要な作家を輩出た。後半の講義では19世紀末から現代までの、そうした苦闘に満ちた営為の歴史をたどっていく。	
		哲学	西洋の哲学者たちが、哲学の問題として考えた、彼ら自身のテキストを通して考え直す。西洋哲学の特質はギリシャ哲学とキリスト教信仰をその基調に持つ点である。西洋哲学は、中世においてギリシャ哲学は厳密な論理的手法を特徴としていたため高次の神話というべきキリスト教と相対することになった。両者の緊張は他に例を見ない強烈なものとなった。こうした時代の枠を超えた、思想の比較も試みる。本講義を通じて西洋哲学史における基本事項の理解と、哲学的な思考法の習得を目指す。	
		倫理学	私たちの日常生活には、「～すべきだ」とか「～してはいけない」といわれる事柄が多くある。判断せずには私たちは生きていくことができない、といってもよい。そして、私たちが判断を迫られるケースは、上の例のように単純なものばかりではなく、むしろ複雑で簡単には割り切れないもののほうが多いかもしれない。そして、判断し行動した後に後悔することも…。では、私たちはこの「判断」をどのように行えばよいのだろうか？　答えを見つけるのは容易ではなさそうだ。「倫理」や「倫理学」が存在するゆえんである。 だが、この「倫理」とはいったい何か。また「倫理学」とは何かを本講義を通じて学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	人文・芸術・思想科目	歴史Ⅰ	古代から近現代までの日本の歴史について、３人の教員（小林、開沼、小倉）がそれぞれ５回ずつ担当する講義。取り上げるトピックはそれぞれの時代を理解するために必要な事柄に絞る。最新の研究成果に基づきながら講義を行う。現在，私たちはグローバル化社会の中に生きており，普段の生活の中でも，影響を少なからず受けている。そのような地球人類の歴史がどのように動いてきたのかを、時間軸・空間軸を「動かし」ながら、総合的に捉える。現代の国際社会、あるいはグローバリゼーションの原型は、今から100年ほど前に形成されたという。欧米列強によるアジアやアフリカの支配、大国の論理などを特徴とする、帝国主義的世界体制の成立である。本講義はその複雑な因果関係を読み解き、現代世界の仕組みと歴史を語れる自分になるための入門講座である。	
		歴史Ⅱ	現在，私たちはグローバル化社会の中に生きている。日常の生活の中でも，地球規模の環境問題や世界各地の政治・経済・文化などの影響を少なからず受けている。いわば，私たち人類はただ一つの「地球社会」に生きているともいえる。今日のような地球社会がどのような過程をへて形成されてきたのかを学んでいく。歴史上の同じ出来事について，それを見る人の立場が違えば，まったく違う性質のものとして理解される。それぞれの視点からの世界史像を学んでいく。	
		言語学	本科目では、言語学における、学術的な専門用語は用いずに、言語学の諸分野の基本的な考え方について紹介していく。データとしては、主に日本語を用いていく。本科目では、言語学の考え方がわかりやすいように、平易に紹介している入門書を教科書として用い、その中から学生にとっても身近なテーマを選び、具体的な言語データの観察を通して、言語学の基本概念や分析方法について学んでいく。本科目は、一方的に講義を行うだけではなく、毎回、問題提起を行い、それを皆で考えるという対話的な方法で授業を進める。	
		学術文章作法Ⅰ	本講義では、グループワーク、実習形式を取り入れ、最終的に1,000～1,200字のレポートを書き上る。講義では配布物やワークシートを活用しながら、大学で求められるクリティカルシンキング／リーディングとは何か、レポートとは何かを学ぶ。さらにレポートの論理性・構成、レポートにふさわしい文章、引用の仕方など、レポート作成における基本的なスキルを身につける。なお、本講義は、大学で求められるレポートを書くことが初めて、もしくは書き方が分からないという学生を対象にしている。レポートの書き方は、専門分野や教員によって「書き方の規定」が変わるため、本講では汎用的なタイプを学ぶ。	
		学術文章作法Ⅱ	本講は、講義・グループワーク・実習を取り入れ、最終的には2000字のレポートを書き上げていく。配布物やワークシートを活用しながら、レポートの要であるテーマ設定、レポートに適した文献収集と分析、適切な引用の仕方などを学びます。大学で求められるレポートの構成・考え方・プロセスなど、他の授業で課せられたレポートにも活用してほしい力を身につける。　なお、本講は、大学でレポートなどを書くのが初めてという学生を対象にしています。実際、レポートの書き方は、専門や教員に応じて「書き方の規定」がかわる。したがって、本講では汎用的なタイプを学ぶ。	
		学術文章作法Ⅲ	レポートや書評文の書き方を学習する。レポートや書評文の作成は、大学生に求められるもっとも基礎的な作業であるが、大学に入学するまではあまり経験したことのない作業である。レポートや書評文を書く作業は１つの技術である。レポートや書評文を書くにあたってのルールや作法はいくつかあるにせよ、技術そのものは最終的に自ら実践し、試行錯誤しながら、体得していくしかない。授業ではレポートや書評文のほか、作文の見本を参考にしながら学習し、レポート力、書評力、作文力のアップを図る。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	社会・文化・生活科目	法学概説	法学とは、大学における重要な教養科目の一つであり、法に関係する学問である。卑しくも最高学府で学ぶものにとって、学部のいかんを問わず、基礎的な法律的知識は必要である。また、その知識に基づいた法律的なものの考え方もできなければならない。ゆえに、法や国家、権利・義務など法全般に通ずる最低限度の原則や考え方を理解する必要がある。本講義は、法学を単に法解釈学という狭い意義ではなく教養ある社会人にとって必要な法及び法学の基礎的な知識を学び、法学的思考を養う学問として勉強したい。	
		日本国憲法	日本国憲法が施行されて既に60年を過ぎたが、人間で言えば還暦の齢を超えたことになる。この間、国民主権主義、基本的人権尊重主義、平和主義を基本原理とする憲法は、国民各層の広い支持を受けて、空気のような存在になっている。しかし、反面、憲法改正問題が上がってきている。本講義では、われわれの社会的、政治的、精神的、文化的、はたまた宗教的日常生活に如何に憲法が深く関わっているかを日常の生活の中で接するさまざまな事象を取り上げながら、諸君と一緒に憲法の全体像を明らかにしていく。	
		心理学概論	本講義では「心理学の入門編」として、心理学の基礎的な知識や、心理学の考え方について段階的に学んでいく。感覚・知覚・記憶・学習等などに関する基本的な心のメカニズムの基礎心理学、人の一生を通じての発達心理学、また集団と社会との関係性における社会心理学などについて毎回テーマを決めて進めていきたい。心理学という学問をのぞいてみようと思っている人や，心理学に関心がある人、またはじめて心理学に触れて、生活の中で活かしていきたいと考える学生は，本科目を受講する事を強く勧める。前後期とも同じ授業であるので、前期か後期のいずれかを受講することを勧める。	
	自然・数理・情報科目	数学基礎Ⅰ	数理的な手法を必要とする文系の学生が、大学が提供する数理科目を履修するための準備段階として、再度一部高校の数学の復習を行うことも含めて、数学の基礎を段階的に学んでいく。本科目では数学検定の準2級の受験が単位認定のための「必要条件」と設定しており、受験した学生のみを対象にして、本科目の成績判定を行っていく。なお数学検定の受験には1回の受験あたり、3,000円がかかり、それは学生の個人負担で行う必要がある。	
		数学基礎Ⅱ	数理的な手法が必要な文系の専門科目を履修するための準備として、テキストを用いて、一部高校の数学の復習を含め、数学の基礎を教授する。本科目でで、数学検定準２球の受験が単位認定のための「必要条件」として設定している。受験した人のみを対象に、成績評価を行う。　なお受験には１回3,000円かかり、受験料は学生の個人負担とする。到達目標は、初等数学的な関係式や問題解決に必要な知識・情報を適切に入手し、取り扱いになれることや、「部分分数展開」・「複素平面と極形式」なども取り扱い、数学の基礎力・計算力を高める。	
		物理科学Ⅰ	簡単な数学や物理学を使って、ちょっと変わった不思議な科学について講義する。基本的な数理科学をベースに進めるが、必ずしもそれらの基礎知識を必要とはしない。幅広い科学の中でも空間（次元）、速さ（光の性質）などについての基礎から応用まで、また最先端の内容について興味深い話をする。複雑系科学については、カオスやフラクタルなどの内容が関連して出るが、複雑系科学一般の内容をすべて網羅していない。あくまでも不思議な科学の話しに重点を置く。講義は、座学でなく参加型授業で行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	自然・数理・情報科目	物理科学Ⅱ	現代社会では、電気が空気のように消費されている。例えば、我々は、エアコン、電子レンジ、携帯電話、パソコンなど、便利で高性能な電気製品に囲まれて生活している。本科目では、目に見えない電気の正体をはじめ、電気の生成原理やその発電システム、配電と充電、身の回りにある電気機器の原理やそのしくみなどについて、多角的に学習する。それに加えて、情報社会を支えている身近で大切な光を含めた電磁波について学習を深めていく。	
		コンピュータ・リテラシーⅠ	本科目では，研究発表・卒業論文作成，ビジネス文書作成，およびマイクロソフト・オフィス・スペシャリスト試験などの資格試験に必要な知識とスキルについて全般的に学習をしていく。以下、本科目は次のような内容から構成されている。 ①マイクロソフトオフィスのWord・Excel・PowerPointのアプリケーションを使用した情報の収集・分析，編集・構想，表現・伝達の技能の修得。 ②コンピュータやインターネットを安全的に利用するための情報倫理とマナーについての知識の修得。	
		コンピュータ・リテラシーⅡ	キャリア形成において必要となる、グラフ作成から、統計処理、データーベースの理解・利用をエクセルを使用して全般的に学ぶ。本講義では、自分の履修した時間を中心に、大学のPC教室内のe-Learning教材を用いて学習する。希望者はUSBメモリにe-Learning教材をインストールし、自宅においても学習を行うことができる（ただしシステム等の問題は自己責任）。本講義ではTA/SAのヘルプデスクを活用し、操作方法、学習内容についてアドバイスを受けることができる。	
		プログラミング	インターネットの発展により、現在、私たちの生活のまわりにはWebを介して多くの情報やメディアがあふれている。 本科目ではそのWebページ構造を理解することにより，情報をどのように利用し、そしてどのようにWebを作成していくのか、その方法について学んでいく。本科目では、具体的にはWebページ作成に必要なスキルである，テーブル，スタイルシート，JavaScript等について、実習を通して学び，本科目において自身のWebページを作成するための基礎力を育成していく。	
		情報科学Ⅰ	人間のように外界を認識し自律的に行動する知能ロボット，人間と対話をして人間を支援する知能ロボットの実現が，夢から現実に少しずつ近づいてきている。しかし，人間の対環境・対人認知能力に比べてロボットのそれらは未だはるかに及ばない点がたくさんある。本講義では，人間の視覚・聴覚・言語・対話といった能力が生み出されるしくみを学習する。また，それらをコンピュータやロボットで実現するための方法についてその概要を学習する。	
		情報科学Ⅱ	「QOL(Quality of Life: 生活の質)を向上させる事は、非常に重要な課題である。それを計る為の様々な指標があり、様々な事が立案・実施されているが、本講義では、情報という資格から環境の活用・構築の方法について学んでいく。具体的には、如何に情報化社会の影の側面を抑制し、光の側面をさらに促進して個人と社会のQOLを向上させていくのかという研究課題について、研究の方法と様々な研究事例を用いて、社会工学的な視点から、QOLについて概観していく。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	自然・数理・情報科目	生命科学Ⅰ	近年における生命科学とバイオテクノロジーの進展にはめざましいものがある。それらがもたらす社会的影響には甚大なものがあり、医学の分野においては、それが先端医療というかたちになって直接的に“生命”に関わりながら、「生殖医療」「延命医療」としてさまざまな生命倫理問題を突きつけている。今後も生命科学・バイオテクノロジーの潮流は勢いを強めると予測されるので、その内容を正確に認識し、問題点を把握し、解決の方途を模索することは重要なことと考えられる。ここではいくつかのトピックスを取りあげ、その生命倫理問題を学際的に考えてみる。	オムニバス
		生命科学Ⅱ	生命の基本単位が細胞であることは周知の事実であるが、細胞のことを詳しく学んだら「生きていること」を理解できるかというと、けっしてそんな単純ではない。細胞から出来上がっている「生物」が、どのようにして生まれ、生命を維持し（生きて）、死んでいくのか、その生命現象のしくみこそ、多くのひとびとが興味を持ち、知りたいと思っている。この授業では、生物の一生について、すなわち生物が生まれてくるしくみ、生命を維持していくしくみ、老化、寿命、死のしくみ、をとりあげ、１５回にわたり解説していく。	オムニバス
		環境科学Ⅰ	本授業では、我々の周りに存在する多種多様な植物の持つ特徴とその有用性について解説を行う。中でも野菜やハーブ・大学内の植物など身近な植物を通して、植物が様々な生物の生活に関与し、寄与していることを解説する。生活環境の科学の内容は身近にあるお茶、例えば緑茶、紅茶、烏龍茶、更にはハーブティーなどの成分やその効用について学んだり、味と香りについて化学的に捉えたり、健康食品・お酒・洗濯・ヘアケア・歯の健康管理について学び、身の回りにある毒を有する危険なものについて学ぶ。	
		環境科学Ⅱ	地球温暖化問題に関してインターネットやテレビなどでさまざまな意見や説が飛び交っているため，いったい何を信じて良いのか混乱してしまう。出版された書籍であったとしても温暖化に対する正しい理解を妨げる浅薄な議論が少なからず存在する。そこで本講義は地球温暖化問題がI）どのようにして発見され予測されてきたか，II）どのような原因により起こったのか，III）どのような技術によって克服するのか，IV）どのようにして技術を普及させるのか，といったステップで理解を深めていく。本講義は地球温暖化に対する正しい理解と情報選択をする手がかりを提供する。	
	学際系科目（平和・人権・世界）	21世紀文明論	本講義の目的は21世紀文明構築の第１歩として、 われわれ創大生が建学の精神を“自ら”が探求しつづける 事で、「社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元して いく」（『創造的人間たれ』）人間になることである。そこで、本講義では創立者の思想を基に21世紀文明のありかたを展望するために、各分野の専門家を講師に招く。学生は、多様な講師の話を聞くことで、視野を広げ、さまざまな角度から思考する事ができるようになるであろう。これは、創立者の言われる「創造的人間」への第一歩と考える。	オムニバス
		総合科目特講	この授業は、地球市民を目指す日本人にとっての、国際政治学ないし国際関係論として構想した。その問題意識は、「どうしたら日本という国が、国際社会の中で安全を確保し、繁栄を享受し、名誉を守ることができるか。」である。 序論として、国家の行動原理及び国家の行動を規律する規範について学ぶ。本論において、日本の国益を左右する力のある外交主体（日本自身、中国、ロシア、米国）それぞれの、近代史を概観し、国力の現状、国家として直面する課題、対外政策の特質、日本との関係（日中国交正常化交渉、北方領土問題交渉等を含む）を学ぶ。更に、日本を取り上げる際に「戦争責任問題」、中国を取り上げる際に「台湾問題」、米国を取り上げる際に「安全保障」、「国際平和協力」、「核戦略」、「核軍縮・不拡散」、「中東問題」を学ぶ。	オムニバス

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	学際系科目（平和・人権・世界）	現代マスコミ論	本授業は、「日本放送協会（ＮＨＫ）」と「学術・文化・産業ネットワーク多摩」の提携講座である。「学術・文化・産業ネットワーク多摩」とは、多摩地域にある大学・短大、自治体、企業など80団体が参加して地域の活性化を図る連携組織である。その事業の一環として本授業は行われる。具体的には、毎回、ＮＨＫの各セクションの責任者が担当し、現場感覚にあふれた授業が展開される。毎年、授業を行う開設大学が変わるが、本年度は東京工科大学で開講する。授業は東京工科大学で行われ、同じ時間帯に創価大学に遠隔配信される。詳しくはガイドブックを配布する。配布場所、時期は掲示する。 なお、履修のためには、「履修申請書」(東京工科大学長宛)の提出が必要。	オムニバス
		国際ボランティア実習	この科目は、The Alliance of European Voluntary Organizationに登録をされた約800のボランティアプロジェクトの中から、１つを選択し、７～９月の夏期休暇を利用して参加をし、後期指定の期日までにレポートを提出することによって単位認定をするものである。具体的なボランティアプロジェクトへの参加は、国際教育交換協議会（CIEE）が主催する。ボランティアプロジェクトは世界の２５カ国・地域で企画運営されており、内容的には社会福祉、文化・芸術関連、環境保護等、多岐にわたるものとなっている。なお、本年度から、レポート提出の際に、CIEEが発行するボランティアプロジェクトへの参加証明書の画像を添付して提出してもらうことになる。	
		八王子学	八王子の過去、現在、未来について知ることをとおし、また八王子や多摩地域で活躍している各分野の専門家から学ぶことによって、身近な地域社会を知ることの大切さを認識し、在学中だけでなく卒業後も、自分の暮す地域社会（海外を含む）をよりよく理解し、貢献していく意識と態度を養うことが目的である。　授業の流れとしては、主に八王子に関連する各分野で著名な外部講師や市職員を招聘して、６０～７０分程度の講義を行ってもらい、その後、１０分～２０分程度、その内容について質疑応答やディスカッションを行う。そこでは、自分の暮らしてきた町や住んでいる地域との比較をおこなったり、地域を知ることの意義などを学ぶ。	オムニバス
		サービスラーニング（社会貢献と学び）	本授業は、学生の社会貢献の意識を高め、ボランティア精神を養い、ボランティアの実践能力を身につけることを目的とする。 ボランティア活動は、「自主性・主体性」、「社会性・連帯性」、「無償性・無給性」、「創造性・開拓性」の原則の基づき行われる活動とされる。 本授業をとおしボランティア活動に参加することにより、地域や社会の構成員としての自覚を深めるとともに、「社会に貢献する」とはどういうことかを考察することが期待される。あわせて、立場や考えの異なる人とのコミュニケーション能力、自己管理能力、率先性やリーダーシップ、求められるニーズを調査・分析する能力、他者の立場に立って考える能力、自分の考えを基に解決策を考案する能力などの涵養を目指す。	
		平和学Ｉ	本講義では核問題に対する「科学者の責任」を鋭く問い続け、平和実現に生涯を捧げたノーベル平和賞受賞者ロートブラット博士と本学創立者池田先生が、核兵器と戦争のない未来を築くための方途を語り合った対談集「地球平和への探求」を読み合わせしていく。両氏は人々が人類共通の利益のために、その能力を最大に発揮できる平和な世界一の実現のために人生を捧げてきた。その2人が核兵器の無い平和をめざす意味をどのように考え、平和の達成へどのように、とり組むかを、その方途とアプローチについて学んでいく。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	学際系科目（平和・人権・世界）	平和学Ⅱ	本講義では「平和とは何か」，「我々は平和創造にどのように取り組んでいくべきなのか」といった命題について多面的に考察していく。多種多様にわたる平和への課題に対する平和研究の学際的なアプローチの概要を知ってもらうために，リレー講義方式を採用する。また，適宜学外からゲストスピーカーを招いて，特別講演を行ってもらう。講師の事情により、講義予定変更の可能性があるので、授業計画の詳細についてはガイダンス時に説明をする。	オムニバス
		地域研究Ⅰ	本科目では、「中国」、「中東地域」、「韓国」という日本との文化的、経済的に関連が強い地域を学んでいく。この科目では歴史、社会、政治、国際関係、経済など学際的な視点から、それぞれの地域が持つ特性について明らかにしながら講義を行っていく。また授業内レポートをもとに、講義内では活発な学生間のディスカッションの時間を取り入れ、活発な意見交換を行なっていく。講義内では映像資料等を随時活用し、学修対象地位の理解を深めていく。	オムニバス
		地域研究Ⅱ	本科目では、「アフリカ」、「ドイツ」、「イギリス」、「ロシア」などの広範な国々について歴史、社会、政治、国際関係、経済など、学際的な視角から、それぞれの地域が持つ特性や、日本との相違点等について講義を通じて明らかにしていく。本科目では、それぞれの講義に明確な、テーマを設定し、学生間のディスカッションの時間を取り入れ、学生間で、活発な議論や、意見交換を行なっていく。また当該地域の現状を、より効果的に理解できるように、講義内では必要に応じて映像資料等を随時活用していく。	オムニバス
		日本研究Ⅰ	本講義では、「日本の食」、「健康観」、「日本社会の仕組み『世間』」、「日本の青年層の睡眠事情」、「日本のエネルギー問題」などの、日本に関連した幅広い学際的なテーマを設定し、「日本」「日本人」というものを多角的に捉えていく機会を、提供していく。講義のなかでは1つのテーマを１～２回に分け、ディスカッションを行い双方向型の学びを実施していく。本講義を通じて全体で８～１０題を予定しており、学生の積極的な講義への関わりが重要となる。	
		日本研究Ⅱ	本講義では、「日本人の精神基盤」、「最近の自然科学の話題」，「留学して感じた(体験した）日常生活の暮らし」、「西洋と東洋の薬」などの、日本に関連した幅広いテーマを設定し、日本というものを多角的に捉えていく機会を提供していく。講義のなかでは1つのテーマについて、ディスカッションを１－２回に分けて行い、教員‐学生間の双方向型の学びを実施していく。本講義を通じて全体で８～１０題のディスカッションテーマをを予定しており、学生の積極的な講義への関わりが重要となる。	
		共通総合演習Ⅰ	フィロソフィーの語源は「知を愛する」である。本科目の履修を通じて学生が「知的生活を楽しむ方法」を修得することを目的としている。本科目が扱う内容は多岐にわたっているが、本科目では特に、①文化、政治、人物等の視覚から捉える海外事情、②開発と援助、③クリティカル・シンキングとメディアリテラシー等の広範な分野について知識を養っていく。なお講義内では必要に応じて、レポート等をもとに、学生間で積極的にディスカッションを行なっていく。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
共通科目	学際系科目（平和・人権・世界）	共通総合演習Ⅱ	本科目は、「知的生活を楽しむ方法」を学んでいく。知的学習の訓練として、本科目では①合理的選択行動が、長期的に悪影響を招く等の「社会学的パラドックス」に関する問題、②民衆思想と女性、③書く題材を「創り出す」（クリエイティブ・シンキング）など、広範な分野について多角的に学んでいく。また講義では、内容に応じて、適宜テーマを設定し、教員、学生間で、扱った内容に関連して、活発な意見交換をできるようディスカッションの機会を設けていく。	

別記様式第２号（その３の１）

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Academic Foundations	本科目では、一年間の海外留学に必要な学術的スキルを学ぶ。リーディング、ライティング、リスニング、ノート・テーキング、プレゼンテーション、ディスカッションの各スキルを学ぶ。さらに、海外留学を経験するうえで、欧米の大学レベルの課題をこなすために必要なタイムマネジメントのやり方も学ぶ。特に、正しい文法と構文を伴う5段落のエッセイを執筆すること、学術論文に必要な注や引用の作法を身につけること、リスニングやリーディングにおいて要点を理解する技術を身につけること、学術的議論を行う能力を身につけること、を目標とする。	
		Academic Foundations: Study Abroad Ⅰ	本科目は海外留学先で行われる。最初のセメスターで、学生はリーディング、ライティング、ディスカッションなどの英語スキルを習得する。新しい学問的環境のもとで、学生は世界中の学生との異文化コミュニケーションを体験する。リーディングは、文化、科学と技術、国際ビジネス、時事問題などに関するもので、さまざまなバックグラウンドを持った学生と議論する機会を提供する。学生は、５段落エッセイを書けるようになり、ディスカッションやプレゼンテーションスキルを磨き、自分の考えや意見を表明できるようになることが求められる。	留学科目
		Academic Foundations: Study Abroad Ⅱ	海外留学の第二セメスターでは、第一セメスターでの学びをさらに深く追求する。リーディングのレベルはより高いものとなり、より現代の社会、経済、政治的諸問題に対して複雑な問題を扱うようになる。学生はまた、クラスメートとの学問的な議論を通して、必ずしも自分の考えに同意しないだろう他国の学生に対して自分の考えを説明する能力を身につけることが求められる。同時に、そうした考えを支えるエッセイや研究レポートを書けるようになることが期待される。コースが終了するまでに、学生は、創価大学に戻ってから受講する英語で行われる科目を受講するに十分な能力を獲得することが期待される。	留学科目
		Cross-cultural Understanding	本科目は、多様な言語とエスニック・グループが混在する異文化状況についての基本的知識を学ぶ。当然ながら、必修となる一年間の海外留学の準備ともなる。文化や言語に関するさまざまな理論的枠組みについての基礎知識とともに、コミュニケーション、相互理解、対話の重要性も学ぶ。異なる文化や言語のあいだに生じる誤解に関しても、様々な状況を想定しながら学んでいく。また、ロール・プレイングを通して、海外生活で経験するような諸状況を再現する。さらに、理由を述べる、許可をもらう、招待を受ける（拒む）、意見を表明する、といった実践的な言語ストラテジーを学ぶ。	
		Introductory Statistics	現代社会において、経済・社会の実態や人々の行動・意識を明らかにするための社会調査が数多く行われている。この講義の目標は、その分析結果を読みとるために必要となる統計学の基礎を理解すること、および実践的側面も考慮した基本的・応用的な分析手法を習得することである。具体的には、確率と確率分布、記述統計、回帰分析、統計的仮説検定、を中心する。多変量解析の一部についても解説したい。また講義では実際のデータを、RやEXCEL等のソフトを用いて統計的分析を行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Introduction to Global Culture and Society	本科目では、社会学、歴史学、哲学の基礎知識と方法論を学ぶ。社会学と近代歴史学がどのように誕生したのか、それらの学問が、構造と機能、社会的葛藤、多文化主義、ジェンダー、人種といった社会的諸問題をどのように扱ってきたのかを検討するのかが主たるテーマである。学生はさらに、自然、社会、文化をめぐる西洋思想とその概念を検討し、西洋哲学史の基礎も学ぶ。ほかにも、社会化、社会構造と相互関係、社会組織、逸脱と社会管理、社会階層、社会変化、経済的衝撃、政治、家族、宗教、教育、社会環境といった多様なテーマをとりあげ、人文・社会科学を専門的に学ぶための基礎を学ぶ。	
		Introduction to International Relations and Politics	国際関係論の基本概念と諸理論を学ぶ入門科目である。まず、リアリズム、リベラリズム、ラディカル・アプローチ等の諸理論や、近年のガヴァナンス論、グローバル化論を検討する。その上で、安全保障、グローバルな諸制度、グローバル政治経済、地域統合などの具体的問題に論及したい。本科目を通じて、学生が（１）国際関係論の知的伝統を理解し、（２）現代グローバルシステムの特徴を把握し、（３）地球大での富と貧困、戦争と平和といった権力関係を分析し、（４）グローバル・ガヴァナンスの実態と限界を検討し、（５）グローバル社会の変容とその将来について一定の見通しを立てることを目指したい。	
		Introduction to Global Economy and Business	本科目では、変化のスピードが速い「経済」と「ビジネス」の分野を理解するために、その基本的な理論と、それが現実にどのように機能しているかについて明らかにしていく。本科目の学修では以下の点に留意して展開していく。第１にグローバル化という現象が個人と企業に与える影響について、知識を身につけていく。第２に、国際資本市場、国際的なマーケッティング、地球規模の経営戦略など、現在多くの国際的な企業が直面している課題について、様々な事例を挙げながら説明する。	
		Academic Writing Ⅰ	本科目では、海外留学から帰国したばかりの学生を対象として、海外で得たアカデミックな英語能力のさらなる強化を目指す。特に、議論を支える十分な証拠と資料を提示し、適切な引用・注を付した、アカデミックな形式にきちんとのっとったリサーチ・ペーパーを書くために、必要とされる種々のスキルの向上を目指す。引用や参照の仕方、参考文献・ビブリオグラフィーの記し方、書き換え、要約といった技術を学ぶ。個人的な指導がきめ細かく行きわたるように、約20人程度のクラスに分かれる。	
		Academic Writing Ⅱ	本科目は、各演習科目と補完的機能を果たす。学生は、演習の指導教員が課した課題を英語で完成させるために、アカデミックな英作文に関する個人的な指導を受けることができる。加えて、議論を支持する証拠の提示の仕方、適切な引用の仕方や注の付け方といった、アカデミックな形式にのっとった書式の整え方を常に確認し、さらには各演習の分野に即した語彙や専門用語、執筆スタイルについても学ぶ。個人的な指導がきめ細かく行きわたるように、12－15人のクラスに分かれる。	
		Academic Writing Ⅲ	本科目は、演習の指導教員の指導のもと、学生が英語でリサーチ・ペーパーを書き上げるためのサポートを行う。英語担当教員は、演習指導教員と協力しつつ、学問的水準に堪えうる論文執筆を指導する。特に、ドラフトの執筆と推敲の仕方に力を置く。その指導の過程で、議論の裏付けとなる資料の適切な提示や、適切な引用の仕方、注やビブリオグラフィーの正確な記載等について、学生は常に確認を受けることとなる。個人的な指導がきめ細かく行きわたるように、12－15人のクラスに分かれる。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Basic Seminar Ⅰ	本科目は、留学前準備と基礎学習のために１年次前期に配置されたほかの３科目（「Academic Foundations」、「Cross-cultural Understanding」、「Introductory Statistics」）と連関しつつ、１クラス15名以下の演習形式で、４年間の学修計画の策定と学生生活のオリエンテーションを行う。前半は、４年間の学修計画の策定を中心に、また将来のキャリアパスのイメージをつかむために、現在グローバル企業や国際機関等で活躍しているゲストを招く。ほかに、図書館ガイダンスやポートフォリオ（学習実践記録）・ガイダンスも行う。後半には、担当教員と学生の個別相談の機会も設け、個々のニーズにあったアドバイスを行う。	
		Basic Seminar Ⅱ	本科目は、英語圏留学から帰国した後の２年次後期に配置され、本学入学後わずか半年たらずの後に１年間近くの留学経験を積んだ学生たちが、日本社会の文化やシステムを再び受容することを手助けし、さらには今後の学生生活の計画とキャリアパスを策定することを目的としている。「Basic SeminarⅠ」と同様に、１クラス15名以下の演習形式で行う。前半は、自身の異文化経験を自ら発表し、他者の経験を共有する作業を通じて、「異文化理解とは何か」と、実体験に基づいた考察を行い、グローバル・マインドを養う。そのうえで、キャリア・ガイダンスや社会人を招くなどを通して、学生が具体的な進路を模索する際のさまざまなサポートを行う。ほかにも、履修計画やゼミの選定など、学修全般にわたる指導も行う。	
		Seminar Ⅰ	「SeminarⅠ」では、現代のグローバルな問題に焦点を当て、３～４名の教員（人文、政治、経済の各専門領域から少なくとも１名を含む）が一つのグループを構成し、複数回にわたりチーム・ティーチングの手法も取り入れて、共同して演習を進める。学生は、ある問題に関する複数の学問的視座を学ぶことで学際的アプローチを経験すると共に、それと並行して、歴史・文化、政治・国際関係、経済・経営のそれぞれの専門領域で問題をさらに掘り下げて研究する。担当教員は、学生がそれらの諸問題を分析し解決方法を導き出せるよう、各専門領域における諸概念と分析枠組みを提示する。	TT
		Seminar Ⅱ	(Maria Guajardo) 本演習では、リーダーシップの定義や、そのプロセス、今日的課題などを中心に検討する。リーダーシップ論には多くの理論やアプローチが存在するが、これらを多面的に検討する。ジェンダーや文化の問題もまた、リーダーシップと組織の有意性をめぐる議論として検討する。リーダーシップにおける倫理的課題も検討する。公平性、信頼性、倫理的行動についても考察対象とする。演習の最後には、マルチプル・リーダーシップの理論とアプローチを取り上げ、その長所と短所を検討する。 （小山内優） 本科目では、他の講義科目で今日のグローバル社会における様々な課題に対し、複数の分野からの学際的なアプローチを学んだことを前提として、教育、科学技術、行政過程、公的機関の政策決定及び個別分野のMulti-Nationalな交渉過程について、具体のケースに沿って調査研究の方法論を学ぶ。併せて、様々なセクターが発表している各種の資料に関する利用方法や留意点を学ぶ。次に、各履修者が自身のテーマを設定して、その研究計画書を作成する。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Seminar Ⅱ	（小出稔） 本科目では、「Seminar Ⅰ」で今日のグローバル社会における様々な課題に対し、複数の人文・社会科学分野からの学際的なアプローチを学んだことを前提として、特に社会科学としての国際関係論研究の方法論を学ぶ。まず、社会科学の目的とその方法の間の密接な関係を科学哲学の見地から学ぶ。次に、具体的なリサーチの手順に従って、社会科学における仮説の立て方、フィールドリサーチ、アンケート、統計資料の利用等の各種の仮説検証方法について学んだ後に、各履修者が自身のリサーチのテーマを設定して、その研究計画書を作成する。 （高橋一郎） 一国のマクロ経済政策の成否は人々の生活に決定的な影響をあたえることは、デフレに苦しむ日本経済の現状を見れば明らかである。「SeminarⅡ」では、マクロ経済政策の拠り所となっている現代マクロ経済学の出発点であるリアルビジネス・サイクル・モデルを学習し、批判的に検討する。並行して、教員の指導のもとに、各自が卒業研究に関連する先行研究のサーベイ論文をTeXを用いて作成する。その際に、先行研究は、どのようなデータを収集し、どのような理論と数理的手法を用いているかを明示しなければならない。 （杉本一郎） 本科目では、第１に経済全体の動きをとらえた見取り図である「産業連関表」を用いて、産業連関分析における基本的な構造（経済の循環の姿、産業相互の依存関係等）について学ぶ。第２に「産業連関表」を用いて、経済波及効果を算出する産業連関分析の実際と、活用方法について学ぶ。なお本科目では、EXCELを用いて実際のデータを扱いながら、基本構造および分析の手法を学んでいく。それを基に、国、地方自治体レベルで実際に行われている経済波及効果分析の事例を紹介し、学生が自ら対象国、地域を絞り込み、分析を試験的に行う。 （前川一郎） 自分の問題関心から出発し、リサーチ・ペーパーなり論文なりにまとめ上げるには、テーマ設定からノート作成、そしてアウトラインにいたる準備段階での作業が決定的に重要となる。「SeminarⅡ」では、最初の段階であるテーマ設定に焦点を絞り、徹底的にブレインストーミングを繰り返す。そのためにできるだけ多くの先行研究を読み込む。本科目では、国際関係史に関する各自の問題関心に即した研究論文（あるいは研究書）を毎月3－4本選び、論点整理と批判的コメントを中心としたプレゼンテーションを通して議論を重ねていく。そのうえで学生は、「私的」な問題関心から出発し、それを「公」に問うに足る学問的「問い」を提示することを求められる。 （山田竜作） 本科目では、政治理論と社会理論の観点から、近代社会の変容という文脈の中での民主主義・民主化の問題を探究する。特に、民主主義を危険にさらすとされた「大衆」運動に関する古典的な社会学理論と、逆に民主主義を深化させる公的参加としての「市民的」社会運動に関する現代政治理論を取り上げる。それらの検討と相互のディスカッションを通じて、学生は、グローバル市民社会における「民衆のエンパワーメント」についての視座を養う。本科目修了までに、各自の卒業研究のテーマを設定し、研究計画書を作成する。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Seminar Ⅱ	（Laurence MacDonald） 本科目では、学生は、今日のグローバルな諸問題を分析するために、２年次までに学んだ知識とスキルを応用することを学ぶ。この演習では、学生は、文化研究の観点から文化を分析する。文化人類学やエスニシティ研究とは異なり、文化研究は、現代文化の政治的ダイナミクスやその歴史的基盤、対立と定義の軌跡を研究する。学生は、講読、ディスカッション、プレゼンテーション、個々の研究を通して多様な文化を分析する文化研究の理論と概念を学ぶ。 （Ugur Aytun Ozturk） 本科目では「意思決定」について焦点をあてる。個人ならびに組織は、常に、目的を達成するために、多くの制約下のもと、最良の意思決定をしようと試みる。本科目では、最適化モデルとして使用される線形計画法や、整数計画法を紹介し、一定の制約条件のもと、如何に最適化した意思決定ができるか、数理的な手法を学んでいく。次に、企業組織が現実に、直面する様々な制約や課題などの事例をあげ、それに対して、どのような意思決定をすべきか、学んだ最適化モデルを統合して、学生が自らデータ分析を行い、意思決定をする方法を学んでいく。 （Yungchih George Wang） 経営研究を行うための実践的基礎を与えることを目標とする。伝統的な研究・調査計画のさまざまな段階を経験する。担当者の承認を得て受講生は各自、国際ビジネスに関する研究トピックスを選択する。選択した研究・調査計画を実行するために必要な基礎的情報とツールを修得することに注力する。さまざまな問題演習を通して、関連する文献やデータなどを収集し、それを批判的に吟味し、分析し、統合し、文章化し、改訂する。最終的にリサーチ・プロポーザルとして提出してもらう。なお、研究の内容に応じて、研究方法は変わり得る。 （Robert Sinclair） 本科目では、道徳的・政治的価値観が社会的な意味での知識獲得のプロセスにいかに関連しているかを考察する。民主主義の道徳的・認識的擁護についての比較を行う。学生は、「SeminarⅠ」において身につけた基本的なメソドロジーと学際的視点をベースにして、さらに研究を進めていくことが求められる。古典をはじめ今日に至る基本的な研究書の講読、ディスカッション、プレゼンテーション等を通して、研究の深化を目指してもらいたい。 （Hartmut Lenz） 本科目の目的は、学生が、研究計画を立てる際の問題設定の仕方に習熟することにある。さまざまなタイプの問題設定を紹介するが、特に以下の重要な２点に焦点をあてる。（１）１つの要素（独立変数）がある具体的事象（従属変数）に先々影響を与えることに注目する研究。（２）現代的な観点からは不可解に見える具体的難問（つまり変動した従属変数）に関して、過去にさかのぼる研究。本科目では、学生が独自の問題設定をするために必要となるいくつかの選択肢を示したい。それらを踏まえた上で、本科目修了までに学生は、各自の卒業研究のテーマ設定を行い研究計画書を作成する。 （John Glenn） 本科目では、理論的アプローチから実証的な事例研究に至るまで、国際政治経済学と比較政治学における多様で幅広い研究方法を学生に提示したい。同時に、先行研究の適切なレビュー方法、実施可能性調査といった、研究計画を立てる際の手続きについても検討する。学生には、それらの検討及びプレゼンテーションと相互のディスカッションを通して、卒業研究に向けた実質的な準備を開始する時点で必要となる多くの基礎的な研究方法を身に付けさせたい。また本科目の修了までに、各自の卒業研究のテーマ設定と研究計画書の作成を行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Seminar Ⅱ	（Johanna Zulueta） グローバル化社会において、エスニシティと人種は問題化され、理論化され、理解され、あるいは誤解されてきた。本科目では、エスニシティと人種の観点から、多様でグローバルな社会問題を取り上げる。さらに、アジア太平洋・北南米・ヨーロッパ・オセアニア・アフリカの様々なケース・スタディーを通して、エスニックと人種的偏見を中心とした他者への眼差しがどのように社会的相互関係を刺激するかを理解する。学生には、世界中の文化的多様性の価値を認め、同一性と相違性の文脈において様々な社会問題を探求することを望む。	
		Seminar Ⅲ	(Maria Guajardo) 本科目では、リーダーシップの諸問題、とりわけ多様性と包括性の問題を取り上げる。学生は、一つの組織やシステムの文化に多様な要素を統合する際のプロセスを検討する。多様性の中でのリーダーシップとは何か、が主要なテーマとなる。加えて、異なる人種、エスニシティ、そして文化的背景を有した個人間の多様性が、リーダーが組織や職業環境を指導し管理する方法に及ぼす影響について検討する。さらに、多様性に含まれる複雑性も検討する。複雑性を構成する要素としては、たとえば世代間相違、ジェンダー間相違、宗教的信念の違い、性や身体的能力における相違などが含まれる。学生は、地域、国家、国際的な諸状況に応じたケーススタディーを行う。学生はまた、多様性に関する自身の経験に基づいて、いかにリーダーシップを発揮しうるかを考察する。 （小山内優） 本科目では、既に様々な知識や理論、調査研究方法等を他の講義科目で学んだことを前提として、それらがどのような歴史的背景と脈絡から生まれたのかを考察する。「Capstone」科目で学生各人が行う予定の卒業研究テーマに沿って、公共セクター、非営利団体や研究者等が関与する様々な事象に着目し、これを先人の調査分析や先行研究に従って理解するとともに、各人の卒業研究によって期待される成果や意義について考察を深める。 （小出稔） 本科目では、既に様々な国際関係に関する理論の内容を３年次までの講義科目で学んだことを前提として、それらの理論がどのような歴史的背景と脈絡から生まれたのかを考察する。国際関係に関する各種の理論を、その主張する内容に従って、リアリズム・リベラリズム、コンストラクティビズム等の学説史的系譜に置いて理解するだけではなく、そのような理論が現実の国際関係に生じる課題や問題への指針や解決方法を模索してきた試みの集積として理解し、「Capstone」科目で行う学生各人の卒業研究の意義について考察を深める。 （高橋一郎） 本科目の第１の課題は卒業研究（金融・財政、マクロ経済理論、経済政策の分野）の綿密な計画書を作成することである。つぎに、簡単なリサーチ・プロジェクトを行う。単純であってもオリジナルな経済・金融・財政のモデルを構築する。必要なデータを収集し、モデルを（「SeminarⅠ」で修得した数理的手法を用いるために）コード化し、数量分析を行う。第２の課題は、このリサーチの結果をプレゼンすることである。第３の課題は、TeXを用いて、中間報告として、タームペーパーにまとめ提出することである。 （杉本一郎） 本科目では３つの課題に取り組む。第１に卒論研究に関する綿密な研究計画書を作成していく。具体的には先行研究を吟味する事で研究テーマのオリジナル性を明確にし、研究遂行のための統計資料の収集、加工を行い、経済波及効果の算出を試みる。第２に、パイロット調査の結果を演習内でプレゼンする。第３に中間報告として、第１草稿をまとめ、提出する。なお夏季休業期間中、可能な限り研究対象地域の現場に赴き、現場の企画者、自治体職員、民間企業等の当事者とのインタビューを行う。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Seminar Ⅲ	（前川一郎） 「SeminarⅢ」では、「SeminarⅡ」で絞ったテーマから出発し、ノート作成とアウトラインの執筆に至るまでを行う。テーマ作成に至る段階で読み込んだ先行研究に加えて、二次文献のさらなる渉猟、さらにWEB閲覧可能な政府や国際機関の関連文書も含めた一次史料へのアクセスを行い、それらに基づく研究ノートの作成に集中する。二週間に一度、途中経過報告のプレゼンテーションを課し、参加者を交えて議論を重ねる。演習修了時には、「卒業研究」としてリサーチ・ペーパーを書き上げる基本的準備が完了していることが望まれる。 （山田竜作） 本科目は、多文化社会における民衆のエンパワーメントという文脈から「熟議民主主義」の可能性を考える。なぜ「多数決」はデモクラシーのモデルとして不十分か、「異質なアイデンティティ」間での対話はいかにして可能か、熟議民主主義に要請される「民主的態度」とは何か、等々が議論のテーマとなる。とともに、「熟議民主主義」の具体的な実践例や制度設計などについても考察したい。学生には、本科目を通して民主的な対話の理論と実践を探求しつつ、そこで得られた知見を卒業研究に活かす方途を考えることが求められる。 （Laurence MacDonald） 本科目では、学生は、今日のグローバルな諸問題を分析するために、２年次までに学んだ知識とスキルを応用することを学ぶ。学生は、紛争がいかに経済、政治、社会の発展を阻害しているかを考察する。平和・紛争解決研究は、紛争に関与しているすべてのグループが納得する解決に導くように、暴力と非暴力の行動を検証する。これは、紛争の背景にある政治、ジオグラフィック、経済、社会、歴史、宗教的諸要素を考察する学際的アプローチである。学生は、講読、ディスカッション、プレゼンテーション、個々の研究を通して紛争を分析する平和・紛争解決研究の理論と概念を学ぶ。 （Ugur Aytun Ozturk） 本科目では、これまで「SeminarI-Ⅱ」で扱った「意思決定」に関するモデルや手法を、更に進めていく。本科目での到達目標は、経営における「確率的な意志決定モデル」の概念と意思決定基準を理解し、そのうえで実際に学生自らが、「SeminarI-Ⅱ」で学んだ事も含め、分析手法として活用し、意思決定ができるようになることにある。本科目では、企業の経営における意思決定に具体的な事例を多く紹介しながら、意志決定の分析方法を実践する機会を学生に提供し、学生自らが行なっていく。 （Yungchih George Wang） 本科目は継続して、経営分野の研究を進める。経営学研究の様々な方法論的アプローチを更に深く理解させることを目標にする。本科目は科学的、また方法論的接近に対する深い洞察とリサーチ・プロジェクトの立案と実行における実践的訓練を与える。具体的には、データの収集方法、サンプリング技法、調査設計、インタビューの技術、観察方法、分析と解釈、科学的レポートの書き方を学ぶ。本科目終了時には、受講生は研究課題に適した方法論を判断し、実際の問題に適した研究計画を策定する能力を身につけることができる。 （Robert Sinclair） 本科目では、専門知識と自由民主主義の矛盾について考察する。この矛盾を理解するために、民主主義的決定に対する大衆参加の増加を論じる多様なモデルを取り上げ、それぞれの妥当性について検討する。「SeminarⅡ」で深めたメソドロジーと学際的視点をさらに追求し、古典および先端の研究書、論文を読み込み、ディスカッションやプレゼンテーション等を通してアウトプットをする。演習修了時には、「卒業研究」としてリサーチ・ペーパーを書き上げる基本的準備が完了していることが望まれる。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Seminar Ⅲ	（Hartmut Lenz） 本科目では、学生が自ら設定した問題に解を与える際の、理論的概念と経験的観察との相互作用を理解させたい。実証研究を行なう前に問題の解を得ることができない以上、学生は研究計画における理論的枠組みで次の３点を示さなければならない。（１）あるテーマを研究対象としようと考えた最初の着想（学生自身の理論）、（２）自分の理論・モデル以外では説明がつかないとする根拠、（３）逆に、自分の研究に他の理論・モデルが当てはまる可能性。本科目では、学生が確かな理論的枠組みを発展させるためのいくつかの選択肢を示したい。 （John Glenn） 本科目では、国際政治経済学・比較政治学の研究方法を、いかにして実際の事例研究に具体的に適用するか、さまざまな例を学生に示したい。それを経た後、学生は自らが卒業研究で追究したい事例を最終確定するとともに、要請される研究方法についても明示できなければならない。例えば、世界中に存在する福祉制度モデルについて演習内で検討した上で、学生は複数の諸国間の福祉体制の違いについてどのように比較研究するか、アプローチの仕方やリサーチの手順など実際の研究計画・スケジュールを立てることになる。 （Johanna Zulueta） ジェンダーは社会的プロセスを理解するうえで重要である。なぜならジェンダーは、人種、エスニシティ、階層とステイタス、権力関係、言語、貧困問題など様々な問題に関連しているからである。本科目では、ジェンダーと女性学の様々な理論、現代の喫緊の課題を分析し、ジェンダー理論を用いるケース・スタディーを紹介する。さらに、世界中の人々の暮らしや、彼ら／彼女らの役割においてジェンダーが果たす重要な役割を論じ、様々な社会プロセスと現象をより深く理解するためのツールとしてジェンダー理論の果たす役割を検討する。	
		Capstone	(Maria Guajardo) 卒業研究は、理論や概念、構造とモデル、プロセスとシステム等、これまで学んだ概念や方法論を基盤にして、学生が学びを修める集大成として位置づけられる。学生は、グローバルないし国際的な文脈で組織のリーダーたちが直面している現実世界の諸問題を取り上げ、研究を進める。意思決定者に対して提案可能なリサーチ・ペーパーを作成することが期待される。作成後の評価においては、他の教員の評価基準との間に格差が生じないよう、ルーブリックを用いるなど、客観性に配慮する。 （小山内優） 本科目では、学生自身が選択した具体的な社会問題・テーマに関する調査活動を行ったうえで、卒業研究として、英語によるリサーチ・ペーパーをまとめあげ、国際教養学部における学修を完結させる。各学生はリサーチ・ペーパーの作成過程で研究内容と進捗状況についてプレゼンを行う。作成後の評価においては、他の教員の評価基準との間に格差が生じないよう、ルーブリックを用いるなど、客観性に配慮する。 （小出稔） 本科目では、現代の国際社会に生起する諸課題の原因を分析し、その解決方法を提示するリサーチ・ペーパーを英文で作成する卒業研究に取り組む。特に、「SeminarI-Ⅲ」で学んだ国際関係論の理論と方法論を前提とし、国家レベルの諸事象・原因に注目した分析を求める。指導教員との相談を経て、「歴史・文化」「経済・経営」分野で学んだ理論や方法論の学際的な応用を試みる場合は積極的に評価する。本科目の履修と同時に、学生は「Academic Writing Ⅲ」を履修し、英文リサーチ・ペーパーの作成に関して、英語担当の学部専任教員の指導を受けることが望ましい。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Capstone	（高橋一郎） リサーチ・ペーパーを作成することがこの科目の目標である。卒業研究は、本学部の教育の仕上げである。独創性のある明確な研究の問い、丹念な先行文献の吟味と関連付け、先端の経済理論と数理的手法、結果と研究の問いとの整合性、論理的なわかりやすい文章などのすべての評価項目で、専門家の批判に堪えるえうる高いものでなければならない。セメスター最初と中間でプレゼンを２回求められる。 （杉本一郎） 本学部での学びの集大成となる卒業研究の完成を行う事を目標とする。「SeminarⅢ」で書き上げた第１草稿を基に、経済効果分析の専門家ならびに、研究対象の現場に立つ当事者に一定の評価が得られるレベルまで達するために①研究テーマの設定、②先行研究、③研究・分析方法、④実証分析、⑤論文構成の整合性等に留意しながら、論文作成を指導教員と連携しながら取り組んでいく。なおセメスターの最初と中間、そして提出直前にプレゼンを３回する事が求められる。 （前川一郎） 最終セメスターにおいて、学生は、本学部での学びの集大成としてリサーチ・ペーパーを執筆する。指導教員の指導のもと、学生はこれまで学んだ歴史学（国際関係史研究）の方法論と学際的知識を駆使して研究を行う。学生には、４年間の大学教育を通して得た知見を動員し、現代社会の諸問題を歴史的因果関係という観点から理解し、これを論証し、そこから未来を展望する視座を獲得してもらいたい。研究とリサーチ・ペーパーの執筆を通じて、学生は英語担当教員と連絡を取り合い、指導を受けることが求められる。 （山田竜作） 卒業研究としてのリサーチ・ペーパー作成を指導する。近代社会と民主主義をめぐる政治学（政治理論・政治思想）・社会学（社会理論・社会思想）の先行研究を十分に踏まえ、かつ、現代の民主化プロセスに伴う具体的な事象や論点（マイノリティ解放闘争、デモ、国際NGOの活動、ポピュリズム、文明間の対話等）と関連づけて、有意味な問題設定と説得力ある論議が求められる。研究とリサーチ・ペーパー執筆の過程を通じ、学生は指導教員及び英語担当教員と連絡を取り合い、個別に指導を受けることが求められる。 （Laurence MacDonald） 最終セメスターにおいて、学生は、本学部での学びの集大成としてリサーチ・ペーパーを執筆する。指導教員と英語担当教員の指導のもと、学生はこれまで学んだ理論と方法論を駆使して研究を行う。学生は、４年間の大学教育を通して得た知見を動員し、社会現象がグローバル世界の一市民である自分とどのような関係にあるかを学問的に理解する。研究とリサーチ・ペーパーの執筆を通じて、学生は指導教員と英語担当教員と連絡を取り合い、指導を受けることが求められる。 （Ugur Aytun Ozturk） 卒業研究では、これまでの学びで培った知識とスキルを統合する機会としてリサーチペーパーを作成する。履修学生はこれまでの演習や科目のなかで身につけた分析手法を適応し、活用して研究に取り組むことが求められる。「Seminar I-Ⅲ」では、「意思決定」に関して、いくつかの最適化モデルの紹介と、分析の手法についてを学んできたが、卒業研究では、現存する企業組織が行った経営判断について分析したリサーチペーパーを作成し、実際に経営者が下した対処方法について評価するする必要がある。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Capstone	（Yungchih George Wang） この卒業研究は「SeminarⅠ－Ⅲ」で扱ってきた国際ビジネスの分野の学習における最終プロジェクトであると同時に、学部教育の最終段階と位置づけられる。リサーチペーパーの作成にあたっては、以下の点に留意する。第１に先行研究の取り組みを通じてテーマのオリジナリティを明確にする。第２に明確な研究・分析方法を提示した上で、実証分析を行う。　なお論文作成時は、構成の整合性等に注意し、指導教員からの指導を随時うけながら作成をしていく必要がある。 （Robert Sinclair） 卒業研究としてリサーチ・ペーパーを作成するための指導である。学生は、「SeminarⅢ」で検討したさまざまな事例や研究方法の中から１つのテーマ・問題を選択し、適切な方法を用いて研究することとなる。リサーチ・ペーパーの執筆は、「SeminarⅢ」での研究プロセスの延長線上にあるが、選択したテーマに関するより厳密な研究が要請される。その際、各自が選択した事例を研究するにあたってなぜその方法を用いるのか、その妥当性を示さなければならない。研究とリサーチ・ペーパーの執筆を通じて、学生は指導教員と英語担当教員と連絡を取り合い、指導を受けることが求められる。 （Hartmut Lenz） 卒業研究としてのリサーチ・ペーパー作成の指導を行う。卒業研究で学生は、「Seminar Ⅲ」までに習熟した研究方法を駆使して、現実世界の具体的事例を分析する。多くの重要な国際交渉における成功例と失敗例を扱うとともに、妥当な制度的枠組みにおいて個々のアクターが下す決定について、分析と再現を試みる。各人の卒業研究は、指導教員による個別指導と進捗状況の確認のもとに進められる。研究とリサーチ・ペーパー執筆過程を通じ、学生は指導教員及び英語担当教員と連絡を取り合い、個別に指導を受けることが求められる。 （John Glenn） 最終のリサーチ・ペーパー作成に向けた卒業研究を指導する。学生は、「Seminar Ⅲ」に至るまでの学びの中で検討してきたさまざまな事例や研究方法の中から、１つのテーマ・問題を選択して適切な方法を用いて研究することとなる。選択したテーマに関するより厳密な研究が要請される。選択した事例の研究にあたっては、各自の方法の妥当性が示されなければならない。研究とリサーチ・ペーパー執筆過程を通じ、学生は指導教員及び英語担当教員と連絡を取り合い、個別に指導を受けることが求められる。 （Johanna Zulueta） 本学部の４年生は、卒業研究としてリサーチ・ペーパーを作成する。このリサーチ・ペーパーは、４年間の学習の結果である。自らの課題を選択するうえに、研究分野に学んだ様々な理論や方法論を使用するように、学生たちに研究をすることを促す。指導教員の指導のもとに、各学生は４年間の大学教育から受けた学際的知識を駆使し、社会現象を理解し、グローバル化された社会空間における自らの位置と関係性の理解を深めることが望ましい。研究とリサーチ・ペーパーの執筆を通じて、学生は指導教員と英語担当教員と連絡を取り合い、指導を受けることが求められる。	
		International Fieldwork	本科目の目的は２年次後期の春期休業期間中に、欧米諸国とは異なるアジア地域への短期研修を行い、学生の異文化理解力、学際的視覚から地域を捉える力、地域の課題に解を求めていく力を自主的に養成する機会を提供することにある。研修先は多様な宗教、文化、言語が並存する複合社会(Plural Society)であり、典型的な植民地経済から中進国へと急速な変化を経験したマレーシアとした。本科目では、マレーシア公開大学での現地研修２週間に加え、事前研修（４週間）、研修後のレポート作成（２週間）の計２ヶ月にわたり協働学修を行っていく。	集中

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	学部共通科目群	Global Workshop Ⅰ	本科目では、世界で活躍するリーダーに、本学部の学生のために講演を依頼する。グローバルに展開する企業のリーダーのほか、国連など国際機関の職員、あるいは先端分野で成果を重ねる研究者など、各界のリーダーを招く。学生は小グループを構成して、講演者との直接の対話の機会を得る。講演者によって語られた国際的視点は、学生との直接の対話を通して、彼ら／彼女らの視野を広く深く広げることになるだろう。学生たちは、講演当日に備えて、テーマに関する事前学習を行う。	集中
		Global Workshop Ⅱ	本科目は、学生たちがさらに多くの各界のリーダーたちと対話を重ねる機会を提供する。グローバルに展開する企業のリーダーのほか、国連など国際機関の職員、あるいは先端分野で成果を重ねる研究者など、各界のリーダーを招く。学生は小グループを構成して、講演者との直接の対話の機会を得る。講演者によって語られた国際的視点は、学生との直接の対話を通して、彼ら／彼女らの視野を広く深く広げることになるだろう。学生たちは、講演当日に備えて、テーマに関する事前学習を行う。なお、本科目では、Global Workshop Ⅰとは異なる分野の識者を招く。	集中
	歴史・文化科目群	Modern World History	本科目は、グローバリゼーションという観点から近代世界の歴史を考察する。19世紀に世界のヘゲモニー国家として君臨したイギリスとその帝国の歴史を具体的事例としてとりあげ、今日の世界を理解するうえで必要な歴史学的テーマを検討する。具体的テーマは次の通りである。1. なぜヨーロッパの初期植民計画は失敗に帰したのか？　2. 貿易は支配の道具なのか？　3. 「帝国の英雄」は本当に英雄か？　4. 奴隷貿易をいかに語るか？　5. 普通の人びとの歴史とは何か？　6. アフリカ史の主人公は誰か？　7. 大英帝国はどのように描かれたのか？　8. なぜ人びとは異なる歴史を語るのか？　9. 脱植民地化は間違いだったのか？　10. コモンウェルス移民のアイデンティティーとは？　学生は、テキストを用いて、議論や発表を通してテーマを掘り下げ、本学部で学ぶ諸学問の基盤として、世界近現代史の基礎的知識の習得を目指す。	
		International History in the 20th century	本科目は、帝国主義の時代から冷戦の崩壊に至る20世紀史を、国際体制の変遷という観点から考察する。これを、1. 帝国主義、2. 二つの世界戦争、3. 冷戦、4. 脱植民地化、5. ポスト冷戦、の五つの局面に分けて検討する。とりわけ、20世紀の激動する国際関係の根幹を構成したと考えられる諸問題、すなわち植民地主義、ナショナリズム、国際組織、ユーロセントリズム、歴史認識問題といった論争含みのテーマを取り上げ、レクチャーやグループワークなどを通して、歴史学の立場からこれらの問題が現代世界に持つ意味を検討する。「Modern World History」の目的と同様に、現代世界を直接に導く世界史の基礎知識を習得し、未来を構想する歴史学的知見を得ることが主たる目標である。	
		Global Issues in Social Policy	政府と国際組織は、社会の保護と福祉の諸政策を計画し、施行するものである。本科目では、近代福祉国家の形成と維持について学ぶ。育児・教育政策、仕事と福祉、老化と人口、移民と文化的多様性といった問題がテーマとなる。とくに、先進国と途上国の社会政策を比較検討する。貧困、平等、雇用といった問題に対するグローバリゼーションの衝撃も扱う。さらに、特定の国家ないし国際的文脈における関連諸政策に対する分析スキルも学ぶ。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	歴史・文化科目群	Education for Sustainable Development	グローバリゼーションは、教育政策に大きな影響をもたらした。とりわけ、国の教育制度において、相違よりも同一性が見られるようになった。これは果たして正しいことなのか。教育はこれに依存していいのか。それは文化・エスニック・ナショナルな文脈に関係しているのか。こうした問題を考えてみる必要がある。この点において、持続的発展の教育は、実行可能な選択肢であるといえよう。それは、個人が、持続的発展の未来をつくるのに必要な知識、スキル、態度、価値観を獲得することを可能にする。本科目は、こうした観点に立ち、先進国と途上国の持続的発展の教育の理論と実践を検討する。教育を通した発展の理論とモデルを検討し、現地に根付いた知識といった、学びと教育の可能性を考察する。	
		Modern Social Thought	社会哲学の研究は、政治的生活の中に見出される社会構造や制度に倫理や道義の概念を適用し、個人と社会の関係を考察することを主たる課題としている。既存の社会制度や政治的実践を評価する基準を考察するために、多様な政府形態と社会形態が分析の対象となる。政府をめぐる現代の自由主義理論や個人主義の諸理論を学ぶにあたり、本科目は、近代性をめぐる二つの競合する概念、すなわち「社会契約論」と「反社会契約論」とに着目する。それぞれの政治的・社会的諸理論がいかに民主主義の未来をめぐる理解に影響を及ぼしているか、政治・社会哲学の主要概念を学びながら、政治的・社会的関係や制度について深い理解を養うことが、本科目の主たる目標である。	
		Global Justice and Intercultural Ethics	正義をめぐる問題の多くが地球的規模の解決を迫られるなか、われわれの社会や政治理論は依然として、正義を保障する主たる責任は国民国家にあると考えている。この科目では、単一の国民国家を超え、いまやグローバル正義として論じられるようになった、正義の問題を検討する。主なテーマは、1. 主権や国民性など国際政治理論における主要な諸概念、2. ロールズの正義論を含むグローバル正義をめぐる諸理論、3. グローバル・シティズンシップ等を含む今日の政治倫理などである。グローバル正義をめぐる古典と現代の理論を読み、主要な哲学的諸問題を批判的に考察することを通して、現代の政治的争点を分析し、喫緊の倫理的課題を論じる政治理論を考察する。	
		Global Sociology and Anthropology	現在のグローバル化された社会を理解するために、社会学と人類学の基本概念を学ぶ。さらに、文化、社会構造、社会的機関といった「社会的影響」は、人間の行動にそれぞれどんな影響を及ぼしているのかを明らかにする。また、集団として行動する個人は、これらの「社会的影響」をどのように再生産・変容するかについても検討する。本科目は、自分自身とグローバル社会を客観的に考察することを学生に促し、批判的思考を広げ、社会学・人類学の観点から社会現象を分析する能力を発達させる。	
		Transnational Migration	本科目は、移民・移動研究についての現代理論と議論を学び、アジア・ヨーロッパ・オセアニア・北南米をケース・スタディーとして取り上げる。さらに、文化・人種・エスニシティ・ジェンダーの諸問題と関連して、移民間の「アイデンティティーの交渉」と、人間の行為（エージェンシー）を形作る社会構造と言説空間のインパクトに関して、総合的に検討する。加えて、人間の移動と権力関係、社会構造とエイジェンシーのダイナミクス、そして場所とアイデンティティーの相関性についても検討する。本科目は、世界中の移民・移動の動向と課題を探求するツールとして役に立つように構成されている。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	政治・国際関係科目群	Contemporary Political Theory	自由民主主義理論、およびそれへの諸批判の検討を通じて、現代政治理論の諸潮流を理解することを目的とする。冷戦終結より20年以上を経た現代、民主主義の「さらなる深化」を求める多くの陣営から、自由民主主義批判がなされている。本科目ではまず、正義論を含む現代自由主義理論、および自由主義内部における正義論批判を検討し、さらに「共通善の政治」（共同体主義、共和主義）、「差異の政治」（フェミニズム）、「アイデンティティの政治」（多文化主義）などを紹介し、「政治的なるもの」の認識を深めたい。	
		Citizenship and Democracy in a Global Age	グローバル時代の民主政治において、なぜシティズンシップ（市民性）が問われるのかを探究することを目的とする。本科目では、政治理論におけるシティズンシップとして「公的参加」と「異質性への寛容」を考える。そして、1970年代の「参加民主主義」から現代的「ラディカル・デモクラシー」の潮流と、冷戦終結前後に世界的に注目された「市民社会論」の流れを把握しつつ、今日的なグローバル・デモクラシー論やグローバル市民社会論へと議論を進める。最後には、グローバル・シティズンシップはいかに可能かについて論及したい。	
		Great Power Politics in the World	本科目は、大国間の協力と競争、将来的なバランス・オブ・パワーについて考察する。特に、日本、中国、ヨーロッパ、インド、ブラジル等の諸国・地域がグローバル政治をリードし得るかどうか検討する。さらに、アメリカの力の変容に注目しつつ、アジア太平洋地域における米中の戦略的な競争関係も考察したい。以上の諸国・地域が、東・南シナ海の紛争回避、イラン核開発の抑制、エネルギー問題についての協力強化、中東・アフリカの地域紛争への介入、等々の諸問題について協力関係を築けるかどうか検討することが、本科目の主たる目的である。	
		International Political Economy	国際関係論の一分野たる国際政治経済学の基本を学ぶ科目である。国家と市場の関係、国際システムにおける権力と富の関係に注目し、近年の諸議論を理解するため多くの具体的事例を検討する。特に、グローバル化が経済発展に及ぼす影響が国ごとにいかに異なるかを追究したい。さらに、深まるグローバル化に対する、国家やグローバルな諸制度による政策的な応答にも論及する。本科目では、学生に（１）国際政治経済学の主要アプローチを紹介し、（２）国際経済の主な論争に関する基礎知識を提供し、（３）国際関係における政治と経済の相互作用を理論的・実証的に理解することを促し、（４）国際政治経済学の文献を批判的に読解する能力を養いたい。	
		International Institutions and Global Governance	本科目では、無政府性を特徴とする主権国家体制の中で秩序や制度的枠組みが成立する過程を学ぶ。まず、国際関係論研究のリベラル的アプローチの系譜に従って、バランス・オブ・パワー、国際法と国際機構、地域統合、相互依存、レジーム、多国間主義という国際社会に成立した各種の制度的枠組みを概観する。さらに近年のグローバル化の進展と共にその必要性が認識されてきた国際社会の公共的利益を追求する制度的枠組みとしてのグローバル・ガバナンスについて、その概念を支える価値観・哲学、グローバル・ガバナンスが求められる問題分野とその分野に関わる主体、具体的に成立している制度について考察する。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	政治・国際関係科目群	International Relations in Asia	本科目では、日本が位置するアジアにおいて展開する国際関係について学ぶ。まず、19世紀以降のアジアの国際関係の歴史的展開を概観し、欧米の被支配地域としての戦前のアジアから、冷戦により分断された戦後のアジア、そして欧米に並ぶ重要な地域として台頭する冷戦後のアジアという変化の過程を観察する。続いて、アジアの国際関係における米国の役割、中国とインドの台頭、地域的枠組みと制度の発展、北朝鮮の核開発問題、日本外交とアジア等々、今日のアジアの国際関係における重要な諸問題をテーマ別に考察する。	
		International Bargaining	本科目は、グローバル化した世界における外交および政府間交渉の重要性について検討する。特に、戦争回避や国際的危機への対応をめぐって国際社会が有効な外交を展開した事例（キューバ危機、ドイツ再統合、日中関係、ボスニア紛争等）、逆に外交が失敗した事例（2003年のイラク戦争、アフガン戦争、イスラエル・パレスチナ問題、北朝鮮とイランの核開発問題）を、取り上げてみたい。本科目では、いかにすれば国際交渉が最大限に有効となるか、外交と実力行使をどのように組み合わせるか、人権侵害や戦争の回避のため国連などの国際機関をいかに効果的に機能させるか、について注目したい。	
		Comparative Politics	本科目では、比較政治学の理論から具体的な事例研究までをカバーしながら、政治の比較研究の方法を紹介したい。特に、民主化のプロセスが国や地域によっていかに異なるかに注目することで、民主主義の概念や、諸外国に民主主義をもたらす国際的な作用といった重要な問題を考察する。本科目では、（１）複数の諸国を体系的に研究する比較研究の方法を紹介し、（２）現代の主要な統治システムを概観し、（３）さまざまな研究を発展的な視座から比較政治学に位置づけ、（４）現代政治における開発・自由化・民主化プロセスの理解を深めることを目指したい。	
		Management of Non-Profit Organizations	先進国政府の多くが市場経済と民主主義の下で財政的な制約を受けて活動している現在、公的な性格を持つ非政府機関が、小さな学校のようなものから世界的な規模の組織に至るまで、様々な公共的分野において多様な展開を見せている。政府セクターからの財政支援が限定されている中で、これらがどのようなミッションや手法によって活動しているのかを、経理及び財政運営の視点と、行政的又は国際政治的視点から、各種の具体的なケースに沿って考察する。	
	経済・経営科目群	Microeconomics	私達の欲望は限りないが、資源は限られている。ミクロ経済学では、消費者や企業はかぎられた制約の下で自己の目的を最大限実現するように行動する、と考える。ミクロ経済学は、市場経済において、個々の企業や家計がどのような意思決定をしているのかを考察する。具体的には、競争や、独占、公共財の供給や、環境問題といったトピックスを通して、ミクロ経済学の理論的枠組みを学習する。また、現実の政策課題（例えば、TPP参加や電力供給体制の望ましいあり方など）を活発に討論し、学習した理論の応用力を磨く。	
		Macroeconomics	マクロ経済学は、一国経済が全体としてどのように機能するかについて分析する。経済全体の活動水準をどのように計測するか。経済が成長し豊かになっていくメカニズムはどのようなものか。景気がよくなったり悪くなったりするのはなぜか。高いインフレに悩む国もあれば日本のようにデフレに悩む国もあるのはなぜか。これらが本講義で扱う主要なテーマである。これらの問題を分析するための新古典派やケインズモデルの基本的な理論を理解し、応用力を高めることを目指す。	

授　業　科　目　の　概　要

（国際教養学部国際教養学科）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	経済・経営科目群	Poverty and Development	本科目の目的は「貧困と開発」（開発経済学）に関連し、２段階の学びを効果的に行うことである。第１段階として、２年次後期の必修科目である「Introduction to Global Economy and Business」で培った知識・方法を基に、開発経済学に関する諸概念や理論を理解していく。第２段階では、問題指向型、政策指向型アプローチを採用し、成長の壁、貧困と所得分配、人口増加、環境破壊等の諸課題の構造を理解し、その上で現実的に考えうる解決策を提示していく。なお本科目では、LTDなどを通じたアクティブ・ラーニングを行っていく。	
		History and Theory of World Economy	本科目の目的は２つの視覚から世界経済を学ぶ事にある。１つ目は経済のグローバル化の軌跡を学び、それが現在の世界経済状況に与えた意義を、グローバル・ヒストリーなどの研究成果と経済史研究の蓄積をもとに理解する。２つ目は国際経済学に関する基本的な理論・モデルを貿易・為替等の側面から解説し、それらの現実的な意味について考えていく。本科目では問題志向型、政策志向型アプローチを採用し、積極的なアクティブ・ラーニングを行っていく。	
		Management Science	本科目の到達目標は、ビジネスの課題解決のために一般的に用いられる分析方法を学生が修得することにある。企業が戦略的な意思決定を行うために、経営管理を分析する能力は重要性を増している。本科目を通じて学生は、ビジネスの課題を識別する方法、解決手法について学んでいく。複雑なビジネス状況を把握するためには実践的な数学的モデルの能力が必要となる。そのために学生はエクセルやその他のソフトウェアに精通し、必要とされる数学的処理、結果分析、対策案の提示ができるようにする。	
		International Business	地球化時代にあって、ビジネスマンは、国際取引における人間関係、組織、環境について知る必要がある。本科目の主要な目標は、実際に国際企業で働くか否かに関わらず地球化時代のビジネスを効果的に行うための道案内をすることである。本科目は受講生が教養ある市民になり政府の政策やグローバル化に影響を与える主要な課題を理解する手助けをする。科目修了時には、学生は国際ビジネスの実際を理解し、説明できるようになる。	
		Marketing	マーケティングは広告および消費者に製品やサービスの購入を促す以上のもので、２つの基本的活動からなる。１）消費者のニーズと目標を見極め、これらの欲求を満たすように製品をポジショニングする。２）マーケティング・ミックス、つまり、消費者に製品を知ってもらい、最も適した流通経路で届け、価格付けを効果的に行い、購入への動機づけをする。本科目では、学生はこれらの活動の原理を理解し、市場を分析し、戦略を作り上げるための初歩を学ぶ。	
		Operations Management	本科目では企業が財・サービスの計画、実施を行う段階で、如何に資源の最適化を行うか、その方法の学習に焦点をあてる。企業は財やサービスを生産のために、国境を越え人的資源、資本を活用し、地球規模で必要とする場所に分配している。本科目を通じて学生は経営管理論の主要な視角とグローバルな市場の役割を学んでいく。また数量的なモデルを用いて経営管理の様々な課題の解決手法を学んでいく。特に実際のケースやシミュレーションを通じて、経営管理改善のための実施方法を学ぶ機会を提供する。	

授　業　科　目　の　概　要 （国際教養学部国際教養学科）				
科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	経済・経営科目群	International Human Resource Management	この科目の目標は日本とアジアを中とした人的資源管理論の国際的アプローチに関して、理論的、実際的含意を理解することである。本科目で扱うトピックスは①人的資源の市場における需要と供給の状況、②特定の社会・文化、ビジネス環境における、異なる人的資源アプローチ、③世界の労働理論のトレンドと変化と問題点、④アジアにおける人的資源の機能と活動、⑤多国籍企業がアジアで経営スタッフをどのように選び、報酬を与えているか等である。	

（注）
1　開設する授業科目の数に応じ，適宜枠の数を増やして記入すること。
2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合類を作成する必要はない。